

126 · 127 · 128 · 130 · 131
129 · 132 · 133 · 134 · 135



136 · 137 · 138 · 139
140 · 141 · 142
143 · 144 · 146
145



147 · 148 · 149 · 150
151 · 153 · 152 · 156
154 · 155



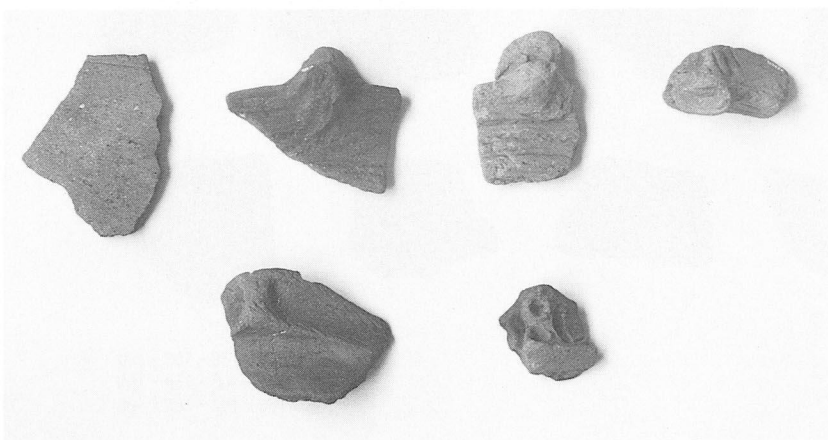
157 · 158 · 159 · 160 · 161
162 · 163 · 164 · 165
166 · 167 · 168 · 169



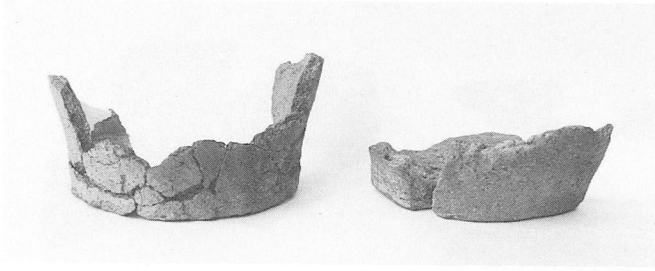
170 · 171 · 172 · 173 · 174
176 · 175 · 178



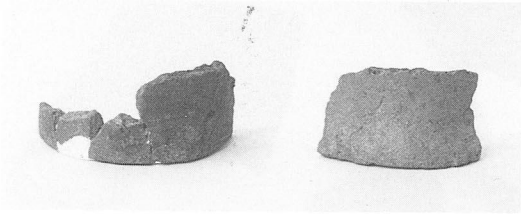
177



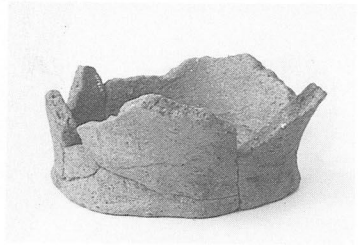
179 · 180 · 181 · 182
183 · 184



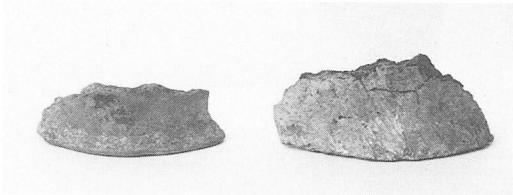
185 · 186



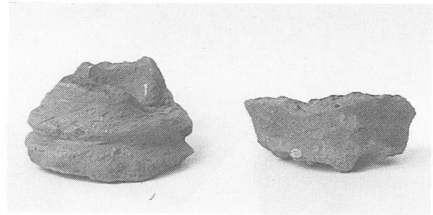
189 · 187



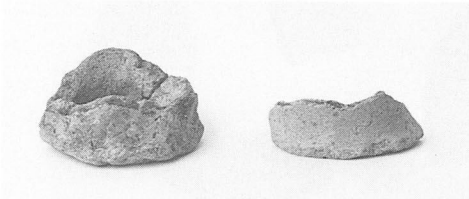
188



197 · 196



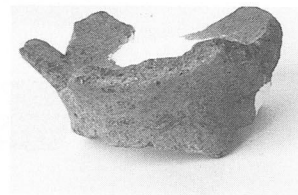
192 · 193



190 · 191



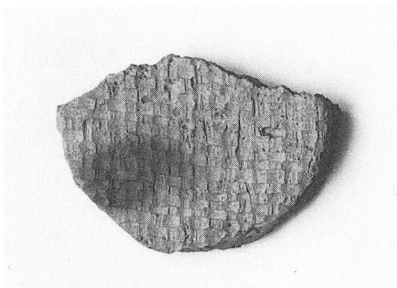
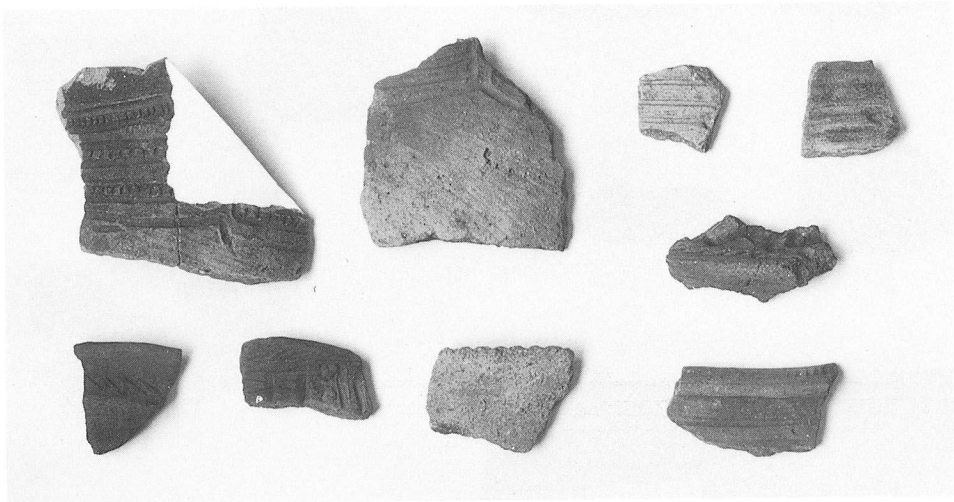
199



194



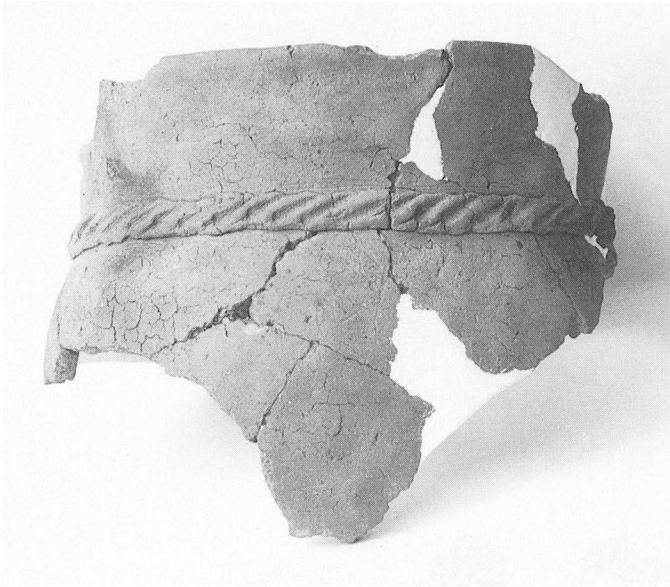
195 · 198



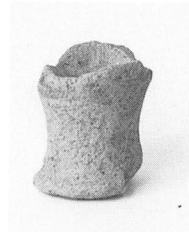
(上) 200 · 201 · 202 · 203
204 · 205 · 206 · 208
207

(下) 211 · 212 · 209 · 210
217
214 · 215 · 216 · 218

219



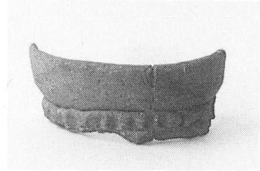
230



243



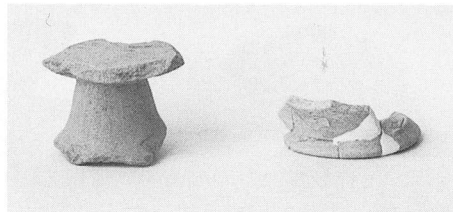
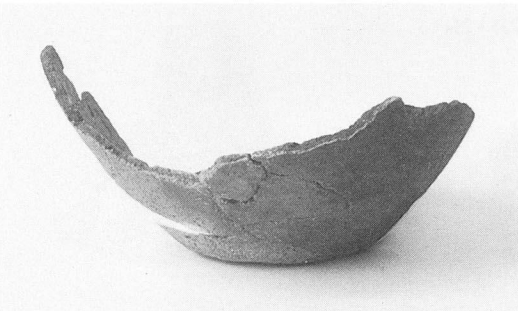
231



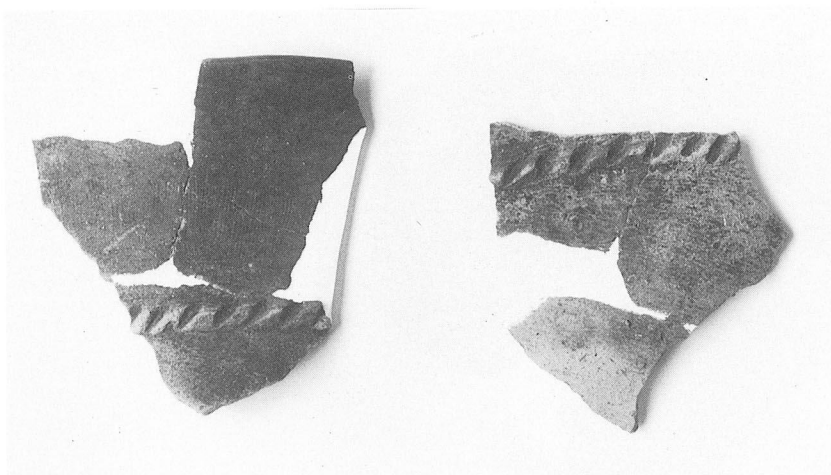
232



241



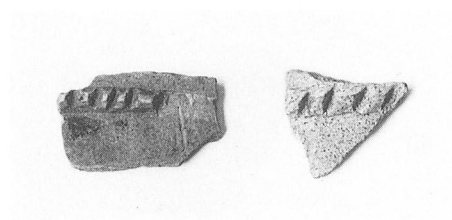
240 · 251



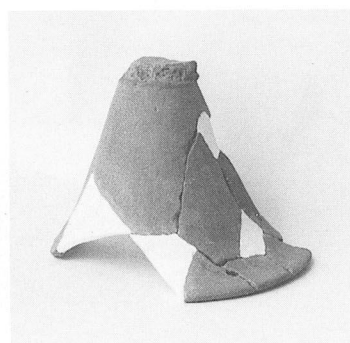
235 · 236



247 · 248 · 237 · 238
245 · 250 · 246

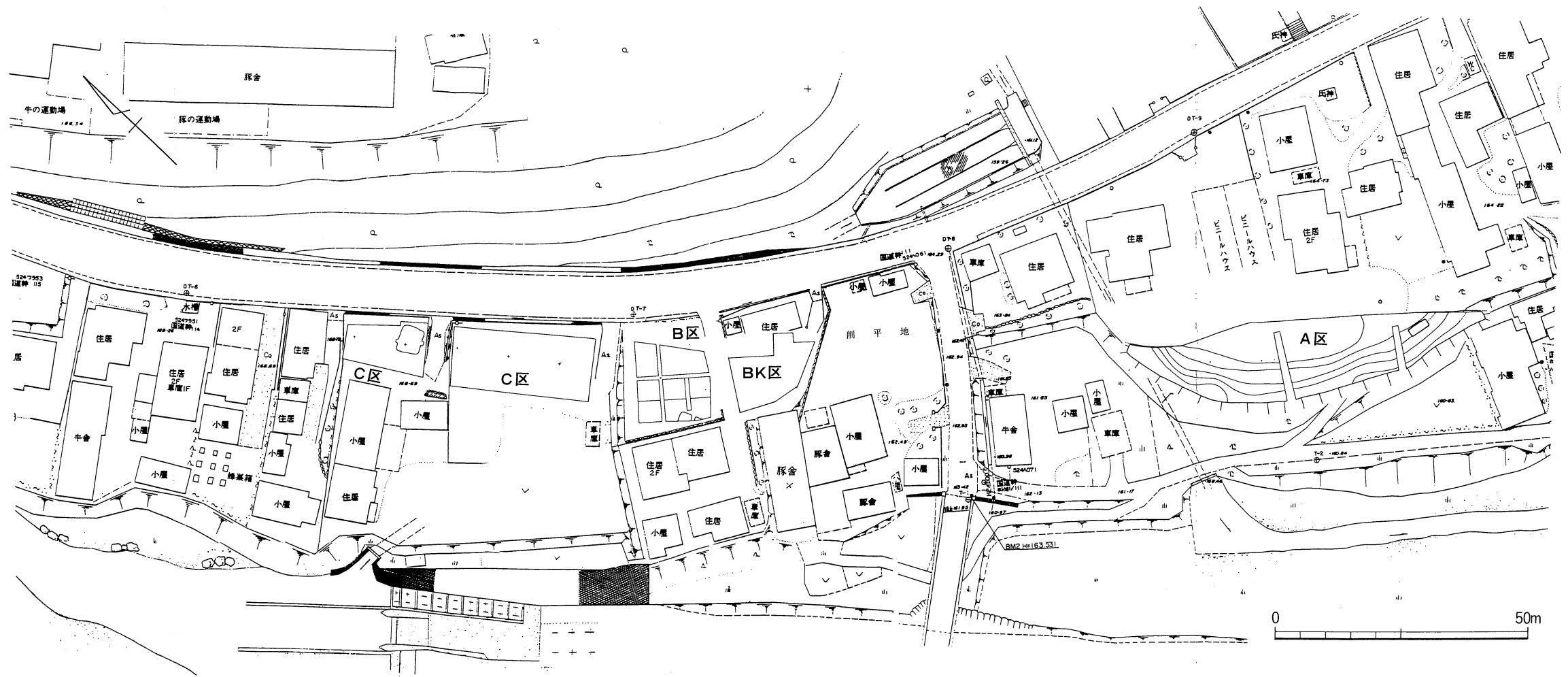


233 · 234



239

第三章 様屋敷遺跡



第1図 様屋敷遺跡発掘調査区(A・B・C・BK区) (1/500)

第三章 様屋敷遺跡

第1節 A区調査の概要

調査地は高崎川によって形成された小規模な河岸段丘地形上にあり、現在の高崎川河床から約6mの比高をもって、南北に長く、幅約70mをもって高崎川の流路に沿う形で延びている。

この面は、現在国道221号の走る面と同標高面にあたり、段丘の全体からみると端部にあたる。調査地の対岸（高崎川右岸）には高崎城址として知られている独立丘陵（以前は奥の丘陵に連続していたという）がある。調査地一帯は、河川に隣接するために河床の変動を常に受けているようであり、周辺一帯の基本層序とは異なっており、砂層および河礫層をはさんでいる。検出した遺構はA-3区で約50ヶ所の柱穴群である。また、A-5区付近からは表土下の攪乱層より陶磁器片が出土した。

1. 遺構

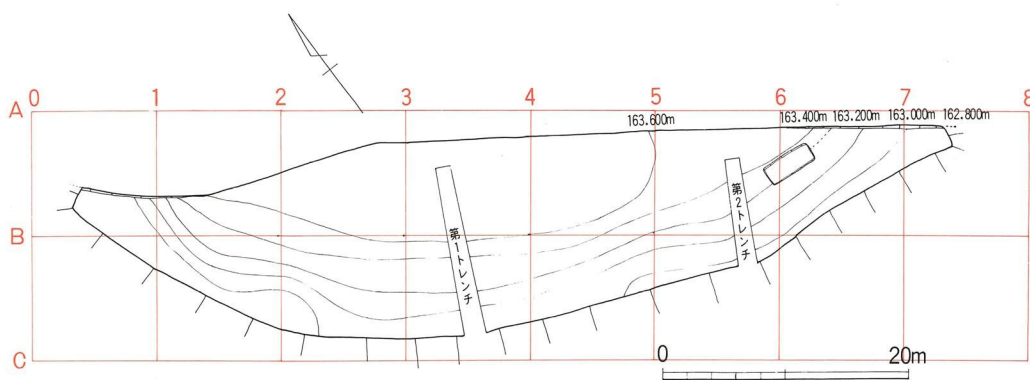
柱穴群（第3図）

少なくとも二時期に分けられる約50ヶ所の柱穴が検出された。Pit 1. 2. 5は特に新しい時期の柱穴であり、出土した磁器により近代のもの、その他Pit 3. 4. 6~11は江戸期（18世紀前~後）のくらわんか碗、陶器片から近世のものとして推定される。

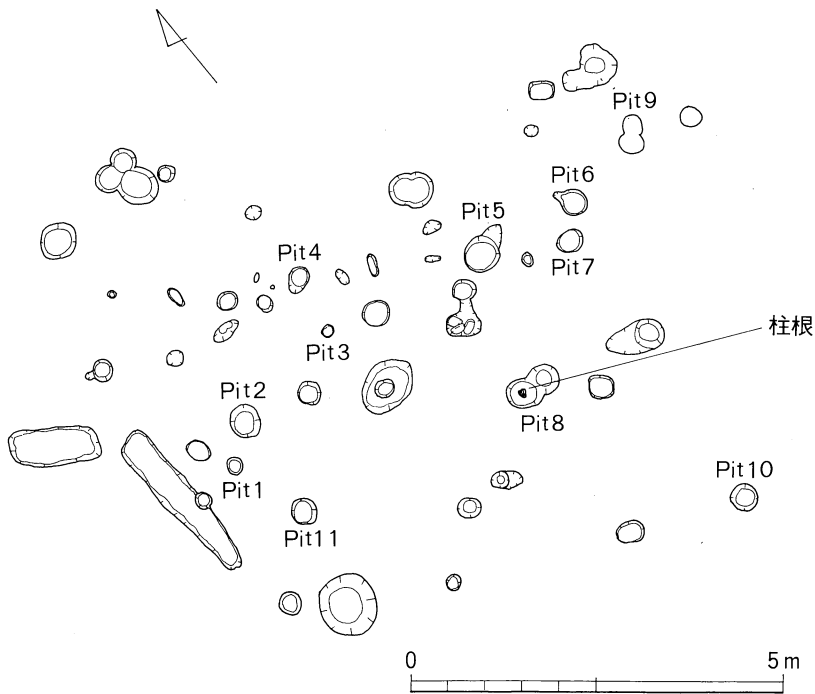
2. 遺物（柱穴より出土した遺物）（第5図）

Pit 3（第5図1）

復元口径9.6cm、器高5.5cmを計測する肥前糸染付網目文碗である。小型厚手で、口縁端には反りが無い。いわゆる“くらわんか碗”であろう。



第2図 A区発掘区



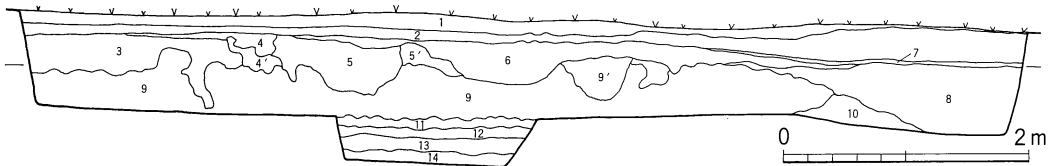
第3図 A区検出柱穴実測図(1/100)

Pit 5 (第5図2)

煙管の吸口である。金属部の継面が明瞭に観察できる。残存金属部の長さ3.7cm、火口直径0.6cm。

Pit 8 (第5図3)

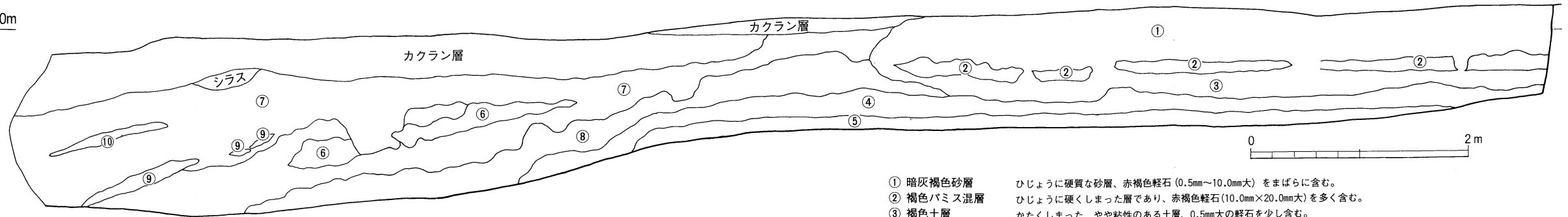
茶家の蓋小片。上面に深草色の釉がかかり、内面は露胎で赤褐色を呈している。



第4図 A区土層断面図

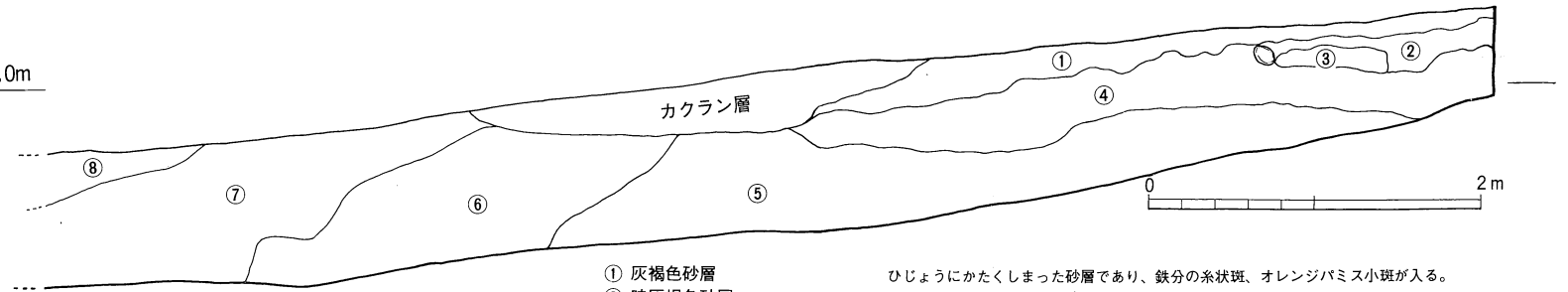
- | | |
|-----------------|--------------------------------------|
| 1. 表土 (茶褐色土) | オレンジバミス小粒、所々に混る。 |
| 2. 明黄褐色カクラン層 | やや粘性、黄色・オレンジ色・灰色・白色の軽石小粒がブロック状に多く混入。 |
| 3. 黄灰色砂層 | 極めて硬くしまったやや粒子の細かい砂層である。赤褐色小粒がまばらに混入。 |
| 4. 褐色カクラン土 | 3層の砂がブロック状に混る褐色土である。 |
| 4'. 〃 | 4層にくらべて、さらに砂ブロックが大である。 |
| 5. 黒褐色土 | やわらかい黒色土に拇指大の黄色軽石(ボラ)が所々に混入。 |
| 6. 黒褐色カクラン土 | 黒褐色土に砂ブロック、シラスブロック大が混り合っている。 |
| 7. シラス | シラスの薄い層となっている。 |
| 8. 黒褐色土 | 小指大のボラを含むボソボソしたカクラン土である。 |
| 9. 暗灰色砂層 | 極めて硬くしまった中粒の砂層である。赤褐色軽石を所々に混入。 |
| 9'. 褐色土+砂 | カクラン層である。 |
| 10. 黄褐色土 | 極めて硬くしまり、赤褐色軽石小粒をまれに含む。 |
| 11. 灰色砂層+赤褐色ボラ層 | 極めて粗い粒子の砂層の下位に赤褐色ボラが一層を形成している。 |
| 12. 茶褐色土層 | やや粘性を帯びるが粒子の粗い砂も混る。 |
| 13. 褐色土層 | 12層より、色調が明るくなる。バミス混入が稀になる。 |
| 14. 黄褐色土層 | バミスをほとんど含まない、やや砂質。 |

163.0m



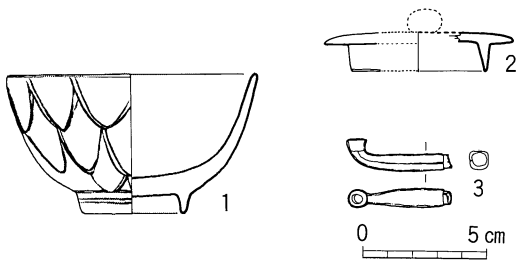
- ① 暗灰褐色砂層 ひじょうに硬質な砂層、赤褐色軽石 (0.5mm~10.0mm大) をまばらに含む。
- ② 褐色パミス混層 ひじょうに硬くしまった層であり、赤褐色軽石 (10.0mm×20.0mm大) を多く含む。
- ③ 褐色土層 かたくしまった、やや粘性のある土層、0.5mm大の軽石を少し含む。
- ④ 灰褐色砂混層 やや砂質でザラザラしている。0.5~0.8mm大の軽石を含んでいる。
- ⑤ 暗灰色砂礫層 砂と小円礫の混る砂礫層である。
- ⑥ 黒色黄色パミス混層 黒色土に黄色軽石が多く混っている。
- ⑦ 茶褐色土層 褐色土に1.0~3.0cm大の大きな軽石が多く混じりザラザラしている。
- ⑧ 黒褐色土層 軽石のほとんど混らないやや粘性土である。
- ⑨ 黄灰色軽石層 1.0~1.5cm大の軽石のみの層である。
- ⑩ 黄色軽石層 0.5~1.0cm大の軽石のみの層である。⑨層とは軽石質がちがっている。

163.0m



- ① 灰褐色砂層 ひじょうにかたくしまった砂層であり、鉄分の糸状斑、オレンジパミス小斑が入る。
- ② 暗灰褐色砂層 ひじょうにかたくしまった砂層であり、5.0mm大の軽石が多く混る。
- ③ 灰褐色砂層+赤褐色パミス混層 1.0~3.0cm大の大きな赤褐色軽石が密に混る。これもひじょうに硬い。
- ④ 褐色土層 褐色、暗褐色土が雲状に混る。かたくしまっており、やや粘性。
- ⑤ 円礫層 1.0~5.0cm大の円礫がびっしりつまった礫層である。
- ⑥ 褐色砂層 比較的、粒子のこまかい砂層、かたくしまっているが、①、②層ほどはしまっていない。
- ⑦ 茶褐色土層 粘性の少ない、小パミス混りの土層である。
- ⑧ 明黄褐色礫層 明黄褐色土に1.0~3.0cm大の礫が多く混入する層である。

第5図 様屋敷遺跡A区土層断面図



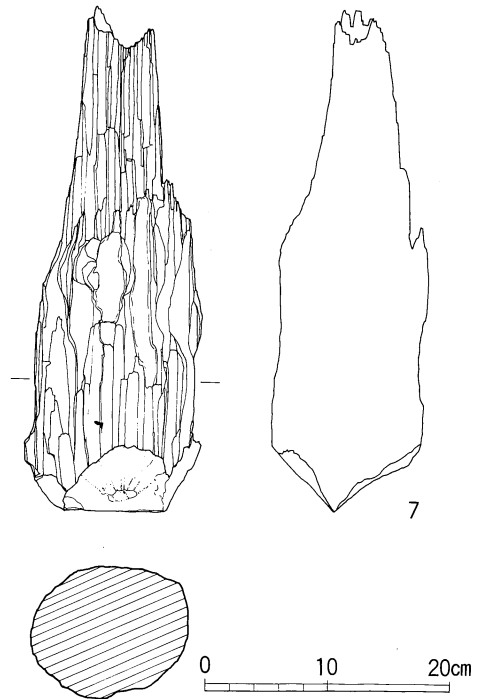
第6図 A区検出柱穴出土遺物実測図(1/3)

縄文土器

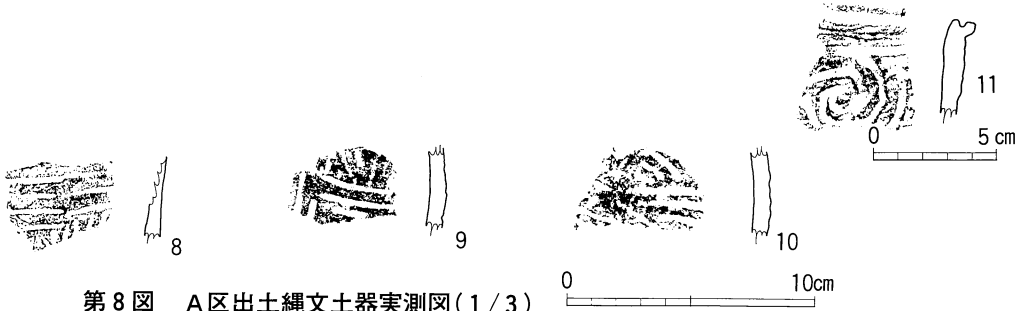
8. 9. 10の3点はA-5区で検出されたものである。いずれも2層、赤褐色のボラが多量に混じって硬質な特徴的層の上位にある1層面出土している。3点とも細沈線が数条単位で横位、斜位に施されているもので、曾畑式土器にあてられる。

8は、3点のうちでもっとも、しっかりした造りをもち、細沈線は、先端の鋭利な施文具によってエッジが鋭く、その断面はV字形を呈す。内面は半分以上剥がれているが、内に木葉痕を残している。胎土内に偶然混入したものであろう。9. 10はやや浅くて構成の曖昧な細沈線が刻まれている。3点ともにごく微粒の石英、黒色粒、長石をやや多く含んでいる。

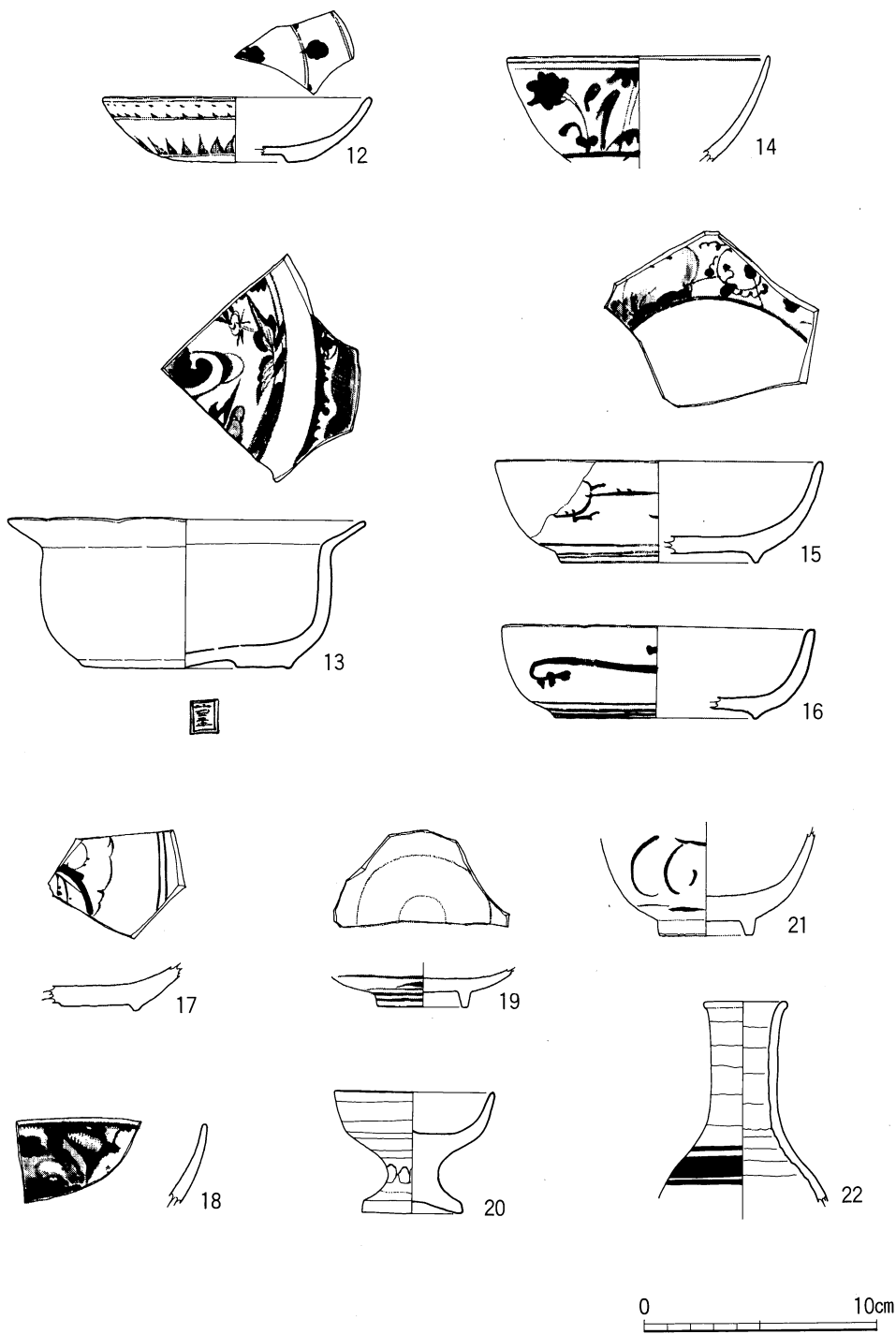
11はA区の試掘溝掘削中に表土（黒褐色耕作土）中より出土したものでこの時期の縄文土器としては、本遺跡で唯一のものである。口縁端部に深い溝がはしっているのが特徴といえる。文様は口縁直下に細沈線による渦巻文がみられる。これは、粗いヨコナデ調整のあと施文されている。内面の調整も、ヨコナデ（板目か）による粗いものである。外面、暗褐色、内面赤褐色を呈す。胎土は緻密で、中に含まれる石英、長石は極々微粒で精選されている。



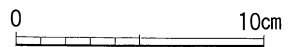
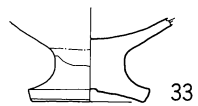
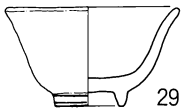
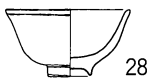
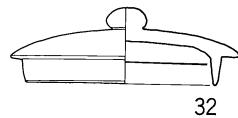
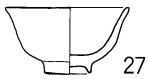
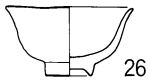
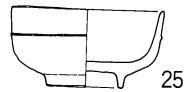
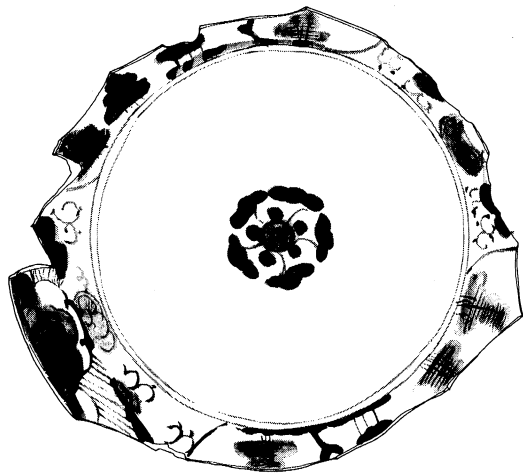
第7図 A区 Pit 8 出土柱根



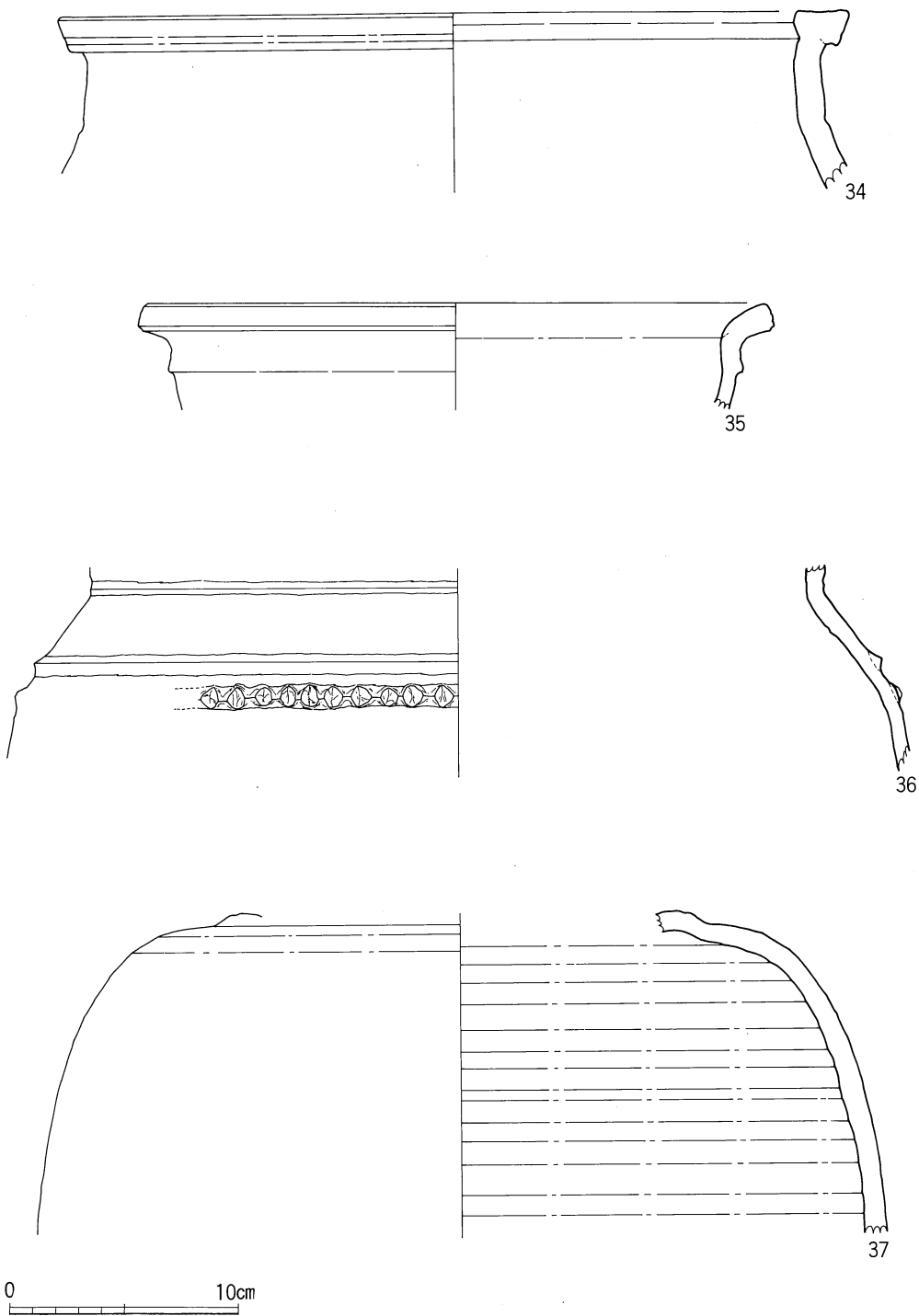
第8図 A区出土縄文土器実測図(1/3)



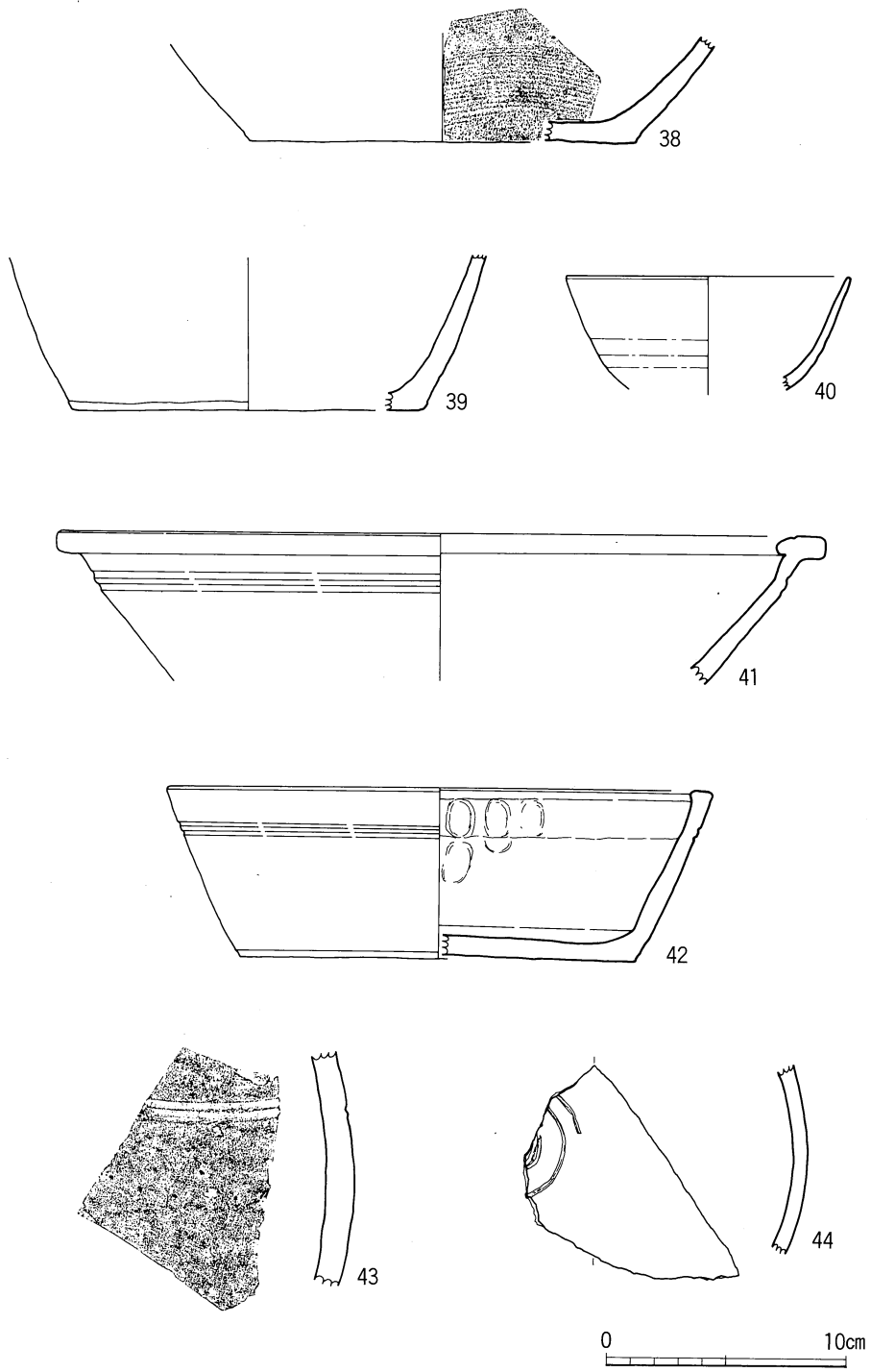
第9图 A区出土遗物实测图(1/3)



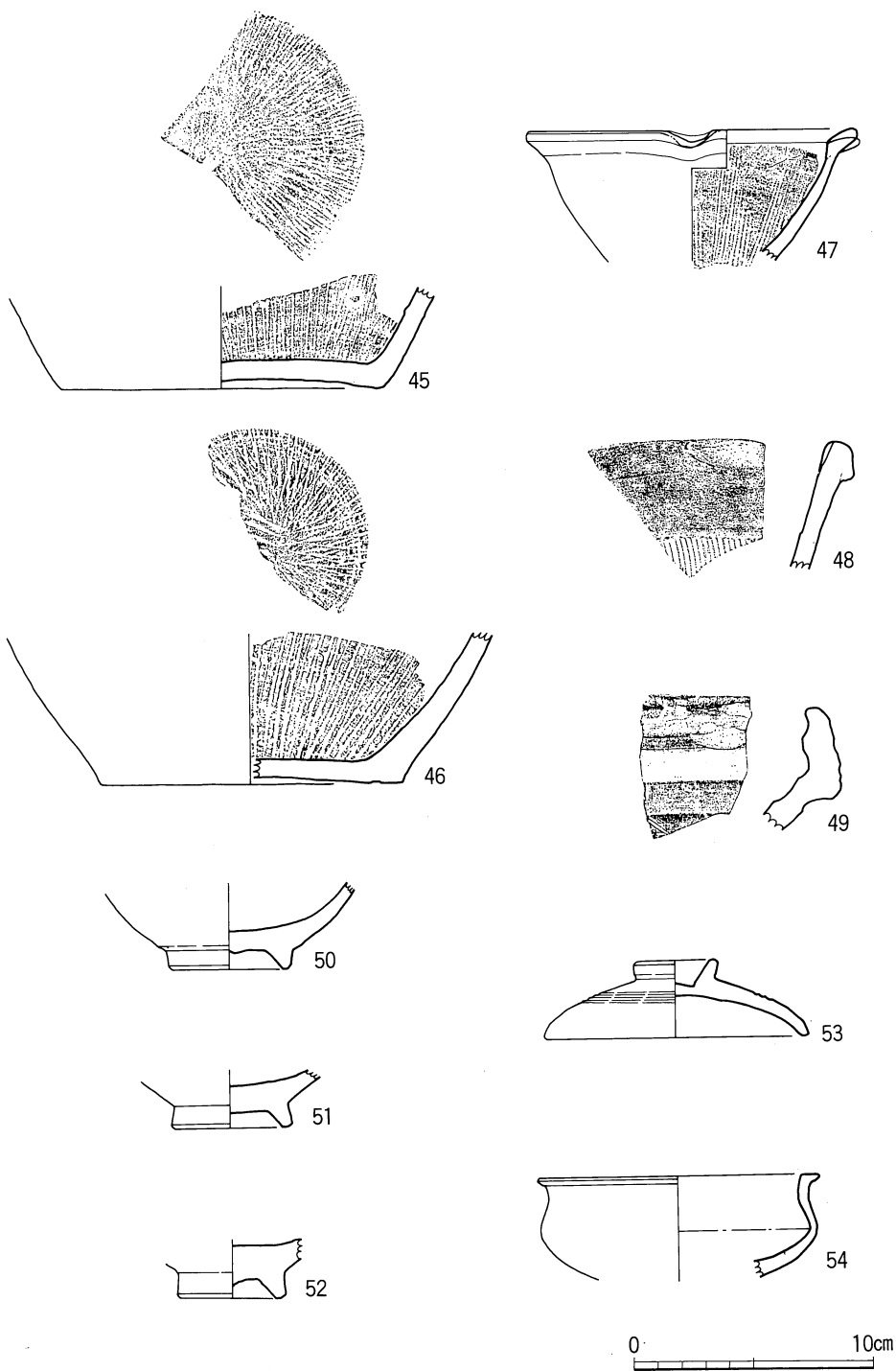
第10图 A区出土遗物实测图(1/3)



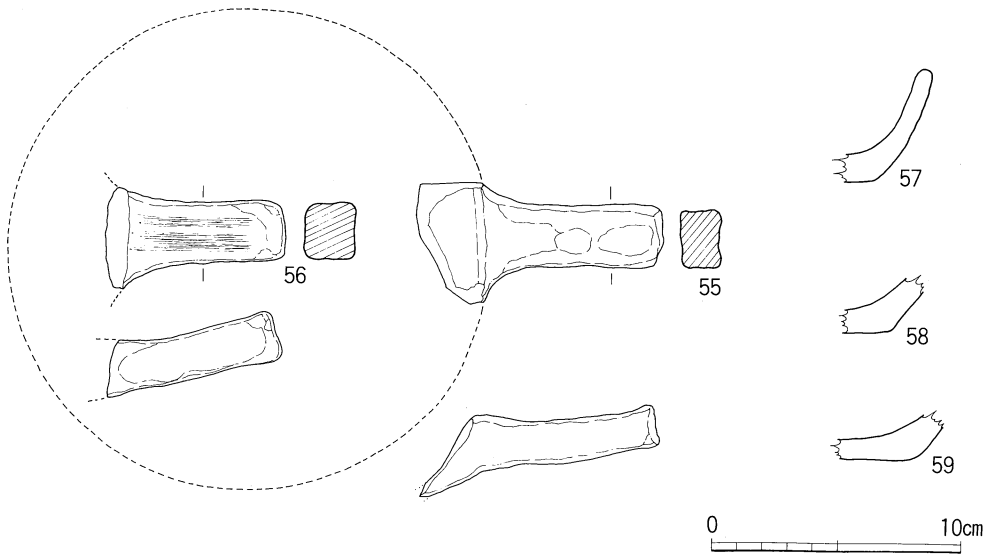
第11图 A区出土遗物实测图(1/3)



第12图 A区出土遗物实测图(1/3)



第13图 A区出土遗物实测图



第14図 A区出土把手付皿実測図(1/3)

陶磁器

12は碁筒底を呈する蕉葉文様の染付小皿である。畳付の部分のみが露胎となる。推定口径11cm内面は草花文。

13は肥前糸の青磁染付深皿、口縁は輪花。外面は薄青緑釉がかかる。口縁の大きく外を向いた内側に、波濤文を描き、見込は草文か。底部は無釉の部分を広くとる蛇の目凹形高台となる。畳付に砂粒がたくさん付着している。高台内に「筒江」銘の崩し字が記され、有田山内の筒江窯で焼かれたことを示している。

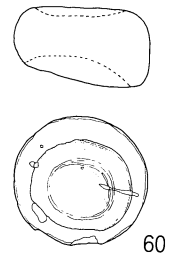
15. 推定口径13.8cmの染付皿である。畳付をのぞいて全施釉。内面主体に草文が描かれる。

20は仏飯器ではほぼ完形。全高5.2cm。口径6.8cmを測る。脚部やや下まで、灰白色釉がかかり以下、底部まで露胎。脚部なかほどに、縦方向の不定な調整痕がみえる。

23は推定口径19cmの染付中皿である。内面外縁に松文か草文を描き、見込に手描による五弁花文がみられる。高台内には何も描かれない。

24は蓋物であり、頂部に取手とおもわれる部位の欠損痕がみられる。内部に曲がる受部のみ露胎であり、他は全面施釉。外面模様は不明。

34は半胴（ハンズ）といわれる苗代川系の甕である。断面台形状の貼り出し口縁となる。



第15図
土製品実測図

茶褐色の釉が内面にまで施されている。

35は断面「く」の字に外反する口縁をもつ鉢になるか、口縁直下に低い突帯状の段がある。内外面ともに褐灰色系の釉がかかる。薩摩系。

36は口縁部を欠く甕。肩部に断面三角形の低い突帯がつく。上段の突帯は刻目なし、下段のそれには、大きく密な刻目が施されている。釉は光沢のないもので、内外面にかかっているが、所々縮んでシワになっている。苗代川系。

37. これは口縁を欠くが、壺形となるか。内面にも暗オリーブ褐から浅黄色のツヤのある釉がかかる。薩摩系。

38～42は、薩摩焼系の鉢である。38には内面底部ちかくにヨコ方向のカキ目が残る。内外面ともに赤灰色から暗赤灰色の釉がかかる。底部にも釉が施されるが、一部には露胎となる箇所をみる。

41. は底部を欠くが、傾きから鉢型になるか。口縁に特徴があり内外に大きく突き出している。外面の口縁直下に、浅くて幅の狭い沈線が二条巡る。内外ともに灰褐色から黒褐色の釉がかかっている。42は口径約21.0cmを計測する浅い鉢で、口縁は器厚そのままに平坦におさめられている。内外面に黄灰色から褐灰色の釉がかかる。底部は露胎なるが、所々に釉が残っている。43. 44は甕の胴部片である。43には細い沈線。44には渦巻状の搔きとり跡が残っている。

45. 46. 47. 48. 49は播鉢である。45. 46. 47は薩摩苗代川窯製品。48は唐津系か。49は備前である。

45. 46. 47には内面くまなく上下方向のカキ目が施されている。47は極めて小型で片口となる。

48には光沢のある釉が施され、やや時期的に新しいものか。49は16世紀頃の典型的な備前の播鉢とおもわれる。

50は薩摩龍門司系の碗。内外面に枯草色の釉がかかり、見込は蛇ノ目状に釉を剥ぎとっている。51は内面に白化粧状の釉でこれも蛇ノ目に剥ぎとる。52は元龍院窯製。茶褐色の釉が施される。これも蛇ノ目状に釉を剥いでいる。

53は蓋物。外面に三条の細い沈線が巡っている。内面の見込は露胎となり、媒付着。灯明皿に転用か。貫入の多い薄緑色釉がかかっている。瀬戸、美濃系のものか。

54は香炉か。灰褐色のツヤの無い釉がうすくかかっている。内面と腰部以下が露胎となっている。産地不明。

把手付皿（第13図55～59）

これも近世陶磁器片とともに混在して出土した素焼の把手付皿である。推定復元形は現代

のフライパン状になるものとおもわれ、底部から胴部側面下部（腰部）にかけて煤の付着が観察できることから、火にかけて食物を煎るために使用されたものか。55、56はその肥手である。あるいは対になるものかもしれない。55は長さ7.0cm、幅2.3cm、厚さ1.5cm、56は長さ6.8cm、幅2.4cm、厚さ2.0cm。胎土は粒子細かく堅く焼きしまっている。57、58、59はその胴部である。57は丸い口縁端をもち、やや内湾気味で器高4.6cmを測る。58、59の底部を観察すると円状のケズリ痕がみえる。

用途不明土製品 (60)

直径5.2cm、厚さ2.0～3.0cmの土製品である。浅い凹みが両面にみられる。1.0～2.0mm大の砂粒が大量に混じっている。

第2節 B区調査の概要

B区の位置する地点は、西から延びる丘陵が高崎川方向に落ちる端部にあたり、国道221号線は、その丘陵端を切断するように南北にはしている。調査区はその国道221号線と高崎川に挟まれた狭隘な準平坦地となっている。土層観察の結果、原地形はやはり高崎川方向に緩やかに傾斜していたことが眺え、準平坦面は後世の削平の結果であることが窺われた。

B区はC区より約1.8m下位（標高168m）にあるが、これも土層観察の結果、最近の土取りのために東側の半分以上が削平され、攪乱された埋土となっており、本来はC区と連続した地形であったと判断された。B区の削平面では、現地表から1.5mまでが攪乱層となり以下、基本層序（第16図）でいう4層からが原層序となる。南側ではかろうじて4層以下が遺存していて、竪穴住居が一軒検出された。

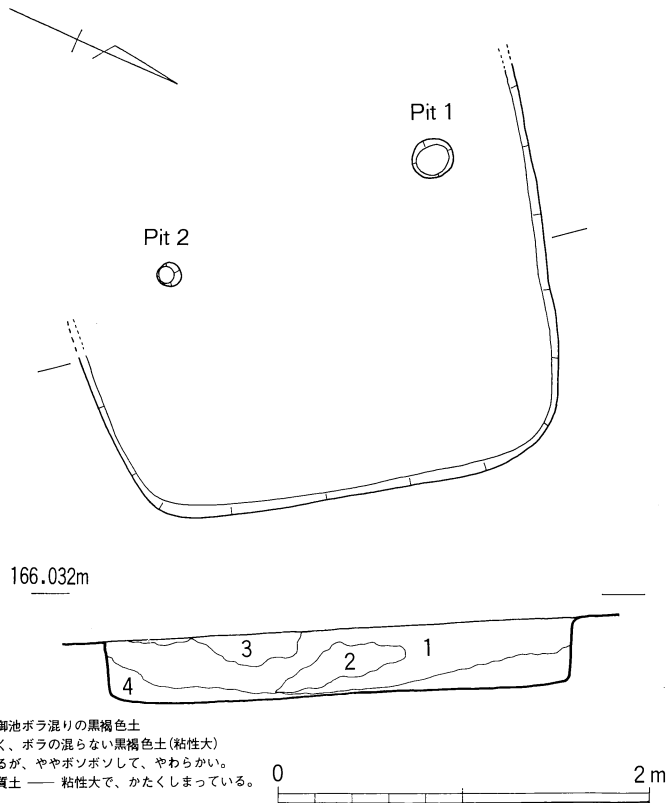
B区南側は削平を受けずに原形を留めている38㎡ほどの高所が残っている。この地点は古来“早馬せと”^{はやま}と呼称される箇所であって、旧街道が丘陵端部を迂回するようにのびた隘路になっているが、この付近に関所、その関連の施設が所在したとつたえられている。隘路一小径は幅1.8m、長さ約22mにわたって遺存し、現在では旧街道の面影をとどめる唯一の地点である。

1. 遺構

1号竪穴住居

B区発掘区西端に位置する。調査区域の西縁に辛うじてかかったもので、住居址全体の二分の一ほどが調査可能であった。残りの住居部分は隣接する宅地により削平されている可能性が大である。

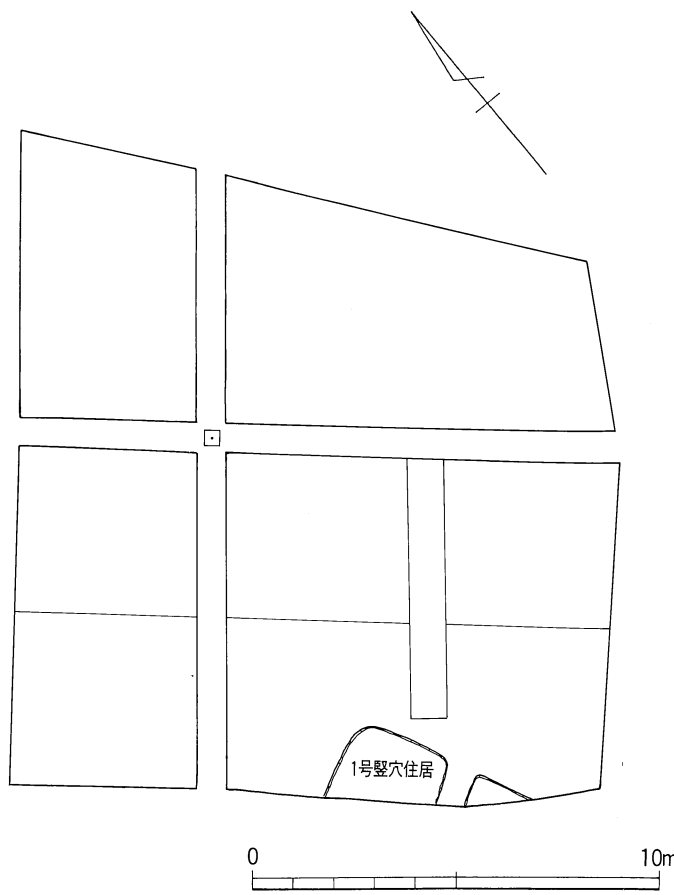
住居プランは隅丸の正方形を呈するもので、東辺で2.3m、壁高35cmを計測し、推定床面積5.3m²の比較的小規模な竪穴住居といえる。住居プランの検出は、御池ボラ上層の黒色土層では検出困難なため、御池ボラ層上面まで掘り下げて住居輪郭を確認せざるを得なかった。検出の状況は黄色の軽石（径1～3cm大）が一面の散在する土層面に、緻密で比較的硬質の黒色土が埋土として入る状態で確認されている。御池ボラより上層のボラ混じり黒色土からは、住居址に伴うと考えられる土器片が、密集して出土しており、本来の住居址上面は少なくとも約20cm上位にあったと推定される。遺物は小破片が多く、床面に近いものはほとんどなく、埋土の中層から上層にかけて出土した。住居床面の中央、壁ぎわに二ヶ所の柱穴が検出された。Pit 1は掘方円形で直径25cm、床面からの深さ23cm、同じくPit 2はそれぞれ14cm、17cmを計測する。



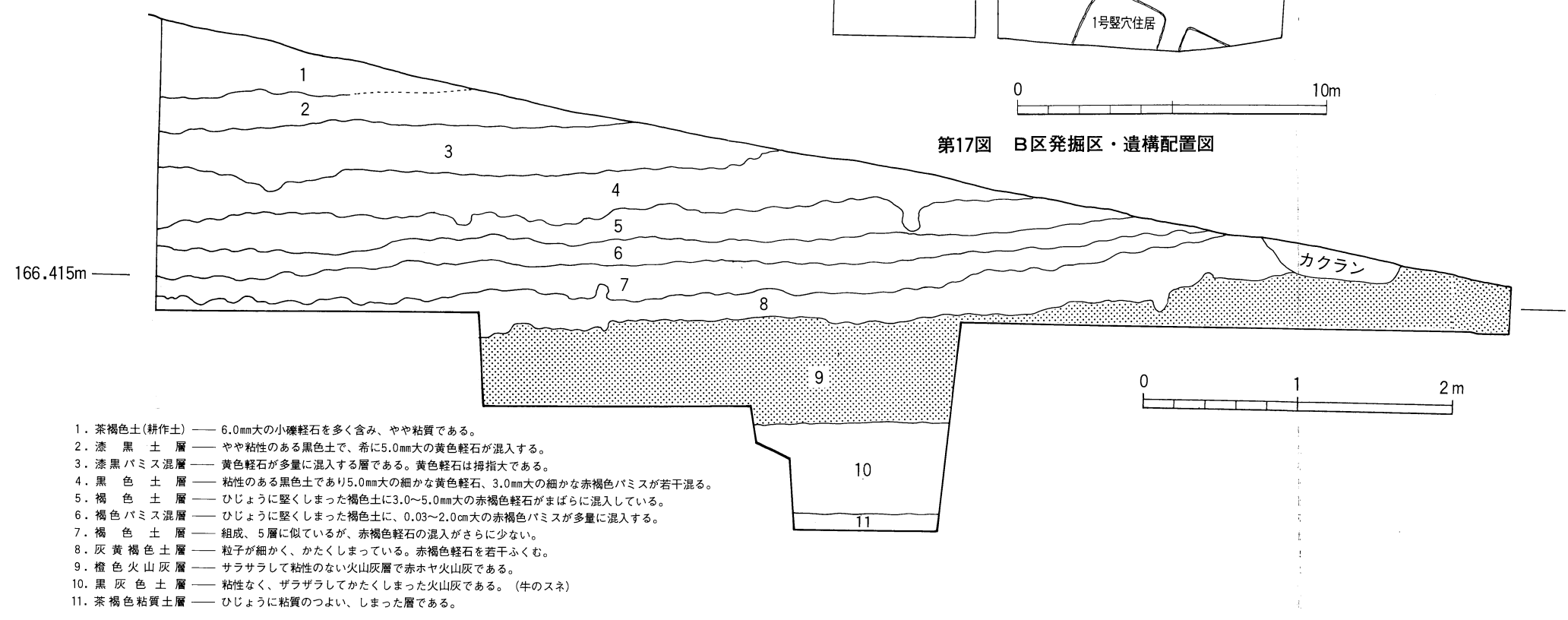
第16図 1号竪穴住居実測図

2. 遺物

61は複合口縁形を呈する壺形土器で、復元推定口縁径10.2cmを計測する。二重の口縁は直立気味に短かく立ち、外側にも大きくはりだしている。胎土は細かく、石英の小粒を多く含み、焼きはやや軟質である。口縁付近は内外ともヨコナデ調整となるが、以下は風化のため調整不明である。壺口縁片はこの一点のみの出土である。

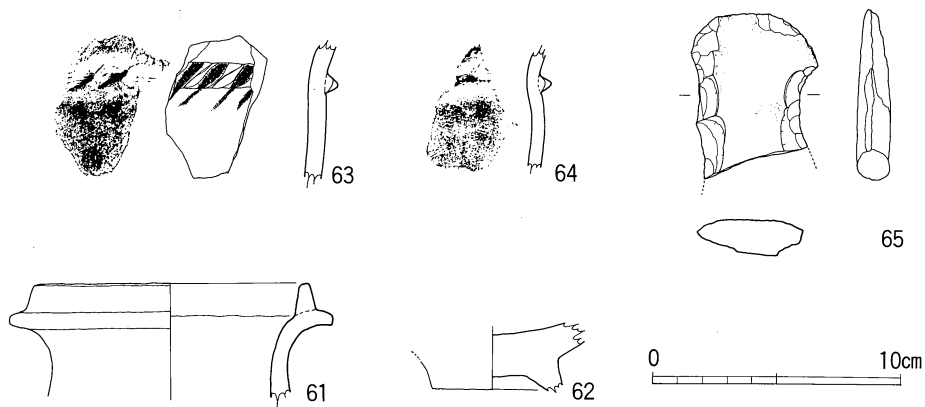


第17図 B区発掘区・遺構配置図



- 1. 茶褐色土(耕作土) —— 6.0mm大の小礫軽石を多く含み、やや粘質である。
- 2. 漆黒土層 —— やや粘性のある黒色土で、希に5.0mm大の黄色軽石が混入する。
- 3. 漆黒バミス混層 —— 黄色軽石が多量に混入する層である。黄色軽石は拇指大である。
- 4. 黒色土層 —— 粘性のある黒色土であり5.0mm大の細かな黄色軽石、3.0mm大の細かな赤褐色バミスが若干混る。
- 5. 褐色土層 —— ひじょうに堅くしまった褐色土に3.0~5.0mm大の赤褐色軽石がまばらに混入している。
- 6. 褐色バミス混層 —— ひじょうに堅くしまった褐色土に、0.03~2.0cm大の赤褐色バミスが多量に混入する。
- 7. 褐色土層 —— 組成、5層に似ているが、赤褐色軽石の混入がさらに少ない。
- 8. 灰黄褐色土層 —— 粒子が細かく、かたくしまっている。赤褐色軽石を若干ふくむ。
- 9. 橙色火山灰層 —— サラサラして粘性のない火山灰層で赤ホヤ火山灰である。
- 10. 黒灰色土層 —— 粘性なく、ザラザラしてかたくしまった火山灰である。(牛のスネ)
- 11. 茶褐色粘質土層 —— ひじょうに粘質のつよい、しまった層である。

第18図 様屋敷遺跡(B区)基本土層断面図



第19図 1号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)

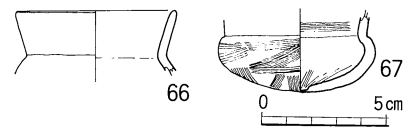
62は、おそらく鉢形土器の底部となろう。焼きがもろく、胎土に1.0mm大の硅石をとくに多く含んでいる。内面は灰褐色、外面赤橙色を呈している。

63、64は甕形土器の口縁部付近であるが、二点とも口縁端部を欠いている。ゆるく外反するものと考えられる。63の絡繩の突帯は高く、刻みも深く丁寧に施文される。刻目痕は突帯下まで、施文原体痕が残る。

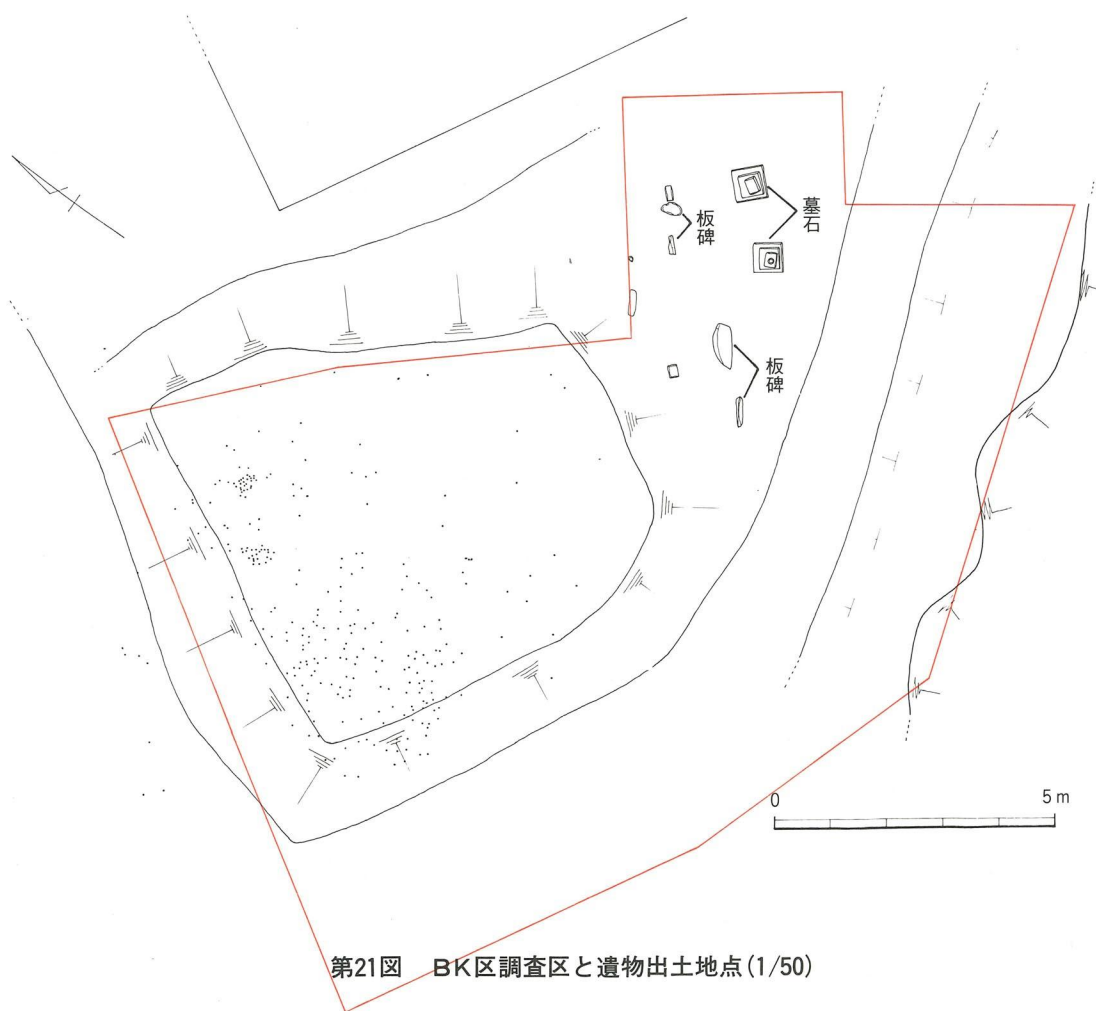
65は打製石斧の上半部片である。いわゆる有肩打製石斧であり、“くびれ”の部分で折損したものと考えられる。表面に自然面を残し、両側辺に表裏面からの剝離を加えている。中粒砂岩製である。

66は、極めて細かな胎土をした薄手の埴の口縁部である。推定口径6.1cmで淡橙色をしている。

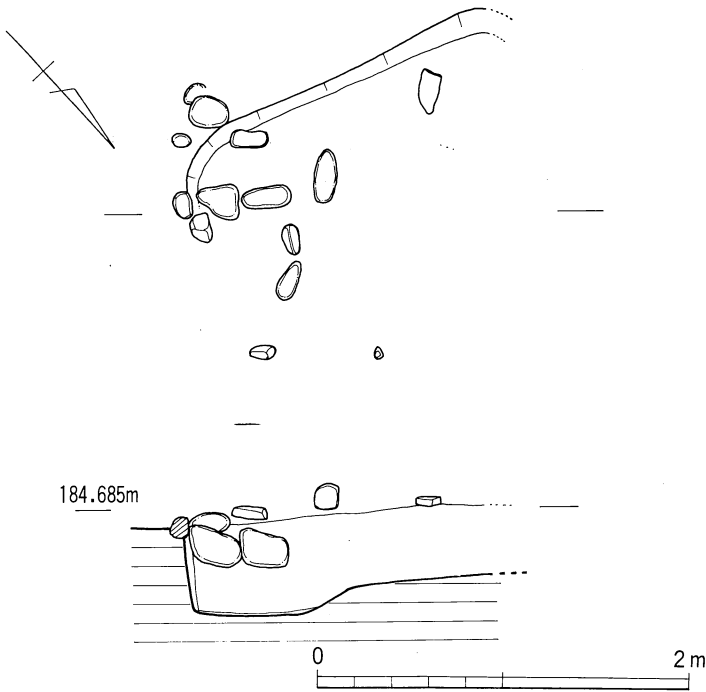
67は、小型丸底埴で口縁部を欠いている。胴部～底部の形状は偏平丸底を呈して、丈が低いのが特徴である。外面には幅狭く、細かいハケメが底部から胴部全面にかけてみられる。内面は口縁内がヨコナデ、底部中心にかけて粗いナデ痕がある。



第20図 1号竪穴住居周辺出土遺物



第21図 BK区調査区と遺物出土地点(1/50)



第22図 配石遺構実測図(1/40)

第3節 BK区調査の概要

近世墓9基が位置するB区南の小高く原地形をとどめる地点(BK区)で検出されたもので、表土下約60cmの第2層の下位面で見とめられた。約20cm内外の楕円礫が径80cmほどの範囲で集石するもので、規則性はみとめられないが、人為的な作事と考えられる。集石下には南側に一辺1.9m、深さ40cm～50cmの不定な掘り込みがみられたが、北側の埋土は不明瞭になり、掘り込みの確実な輪郭はとらえられていない。近世墓の占有する区域に隣接するものの、この土拡自体は墓拡と確定するだけの遺物等の出土はない。

1. 遺物

石組遺構の精査過程で出土した遺物のうち実測可能なものを第21図に掲載した。遺物は表土(耕作によって攪乱されている)から第3層に至る間で出土している。出土品には輸入陶磁器(青磁・染付)、国産陶磁器、素焼土器、真鍮製品等があり、時期は16世紀中葉から19世紀前半までの幅をもっている。

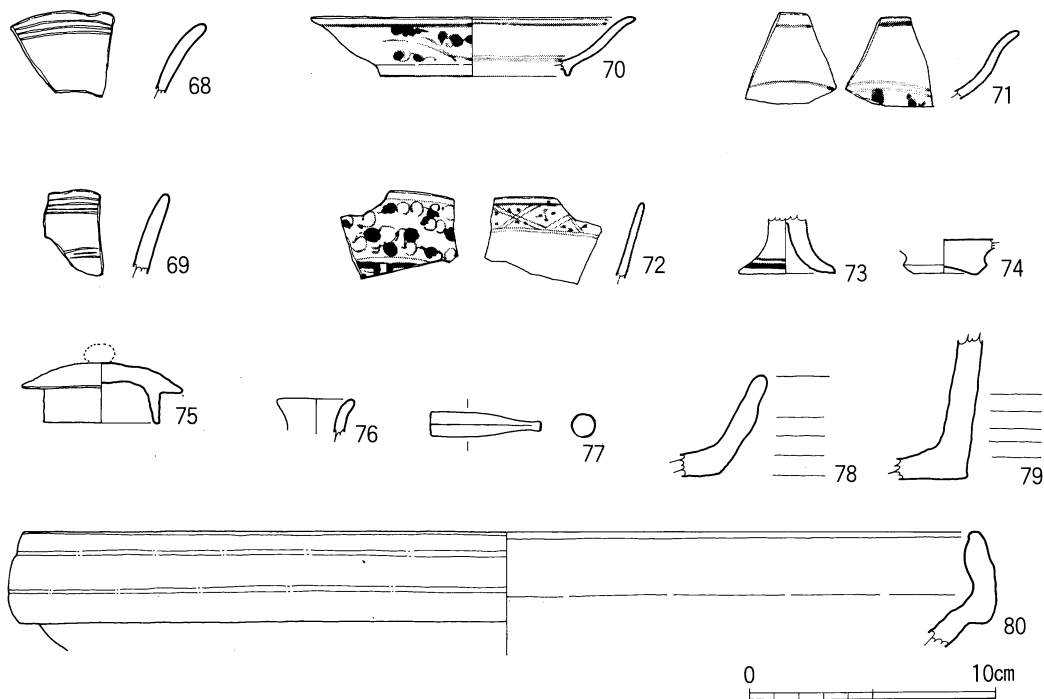
輸入陶磁器

青磁(第21図)

68. 69は青磁稜花皿の口縁部であるが、残存部が少なく口径を推定できない。68は青緑色に発色し、灰白色の胎土をもつ。69はこれも青緑色釉と明灰色の胎土をもつ。68. 69とも内外に細かな貫入がみられる。76は厚く釉のかかる長首瓶の口縁部であろう。

染付

70は推定口径12.5cm、器高2.3cmの小皿。外面の唐草文、内面は口縁直下付近と見込ちかくに二本ずつの回線が巡っている。71は小片で口径が推定できない。70よりやや大ぶりの皿となろう。70とは逆に内におそらく唐草文と回線、外面の口縁直下と腰部付近に一本ずつの回線がみられる。72は碗の口縁部と推定される。外面は唐草文帯下に太線による文様の一部が残る。内面の口縁直下に幅1.0cmほどの草露文様帯がめぐっている。器壁が薄く硬質である。



第23図 B-K区出土遺物実測図(1/3)

国産陶磁器

73は仏飯器の脚部か。脚端部ちかくにツヤのない赤橙色の回線が上絵付で二条巡る。74は見込部が蛇ノ目状に釉が剥がれる。やや上底となる高台内も露胎である。75は口径に比して器高の高い茶家の蓋で薩摩焼系のものおもわれる。

80は備前の播鉢である。口縁外側直下が凹線状になる時期（IV期）のものであるが、内側の条線は残存が少なく不明である。

素焼土器

78は胎土が精選され、硬質に焼成された素焼きの皿様の土器であるが、A区出土の把手をもったフライパン状の器形となるものの一部であろう。器高4.1cmである。

煙管

77は真鍮製煙管の吸口部である。長さ44cm、口径9.0mm。

第22. 23. 24図81~106はB-K区より出土した土器を一括して掲載している。この土器集中区は、住居址ともとれる出土状態を示していたが、黒色土層中にそのプランを見出す

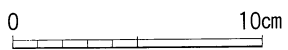
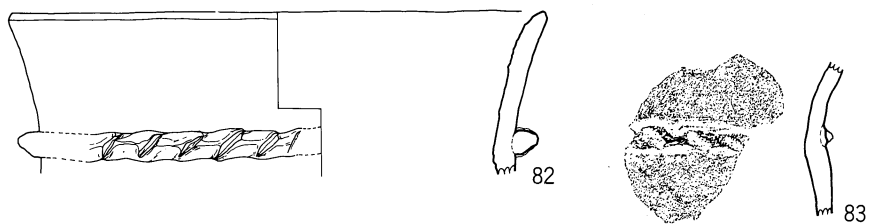
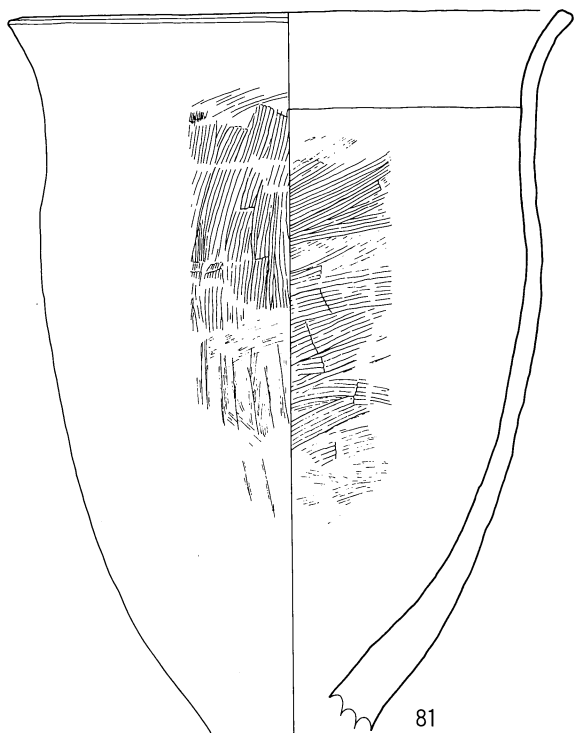
ことはできなかった。出土した破片のうち完形に近く復元できるものが数点である。

81は口辺部から、ゆるく外反する口縁をもつ、やや長胴気味の甕形土器である。底部を欠いている。器外面は縦方向の細かいハケメ、内面はヨコ方向のハケメ調整となっている。外面には全体に煤が付着している。色相はにぶい橙色からにぶい褐色を示し、この時期の標準からすれば暗い。82は極めて弱い口辺の外反を特徴とする甕で、胴部との境に太く盛り上がった刻目突帯を巡らしている。刻目突帯は断面半円形でこれも特徴的といえる。

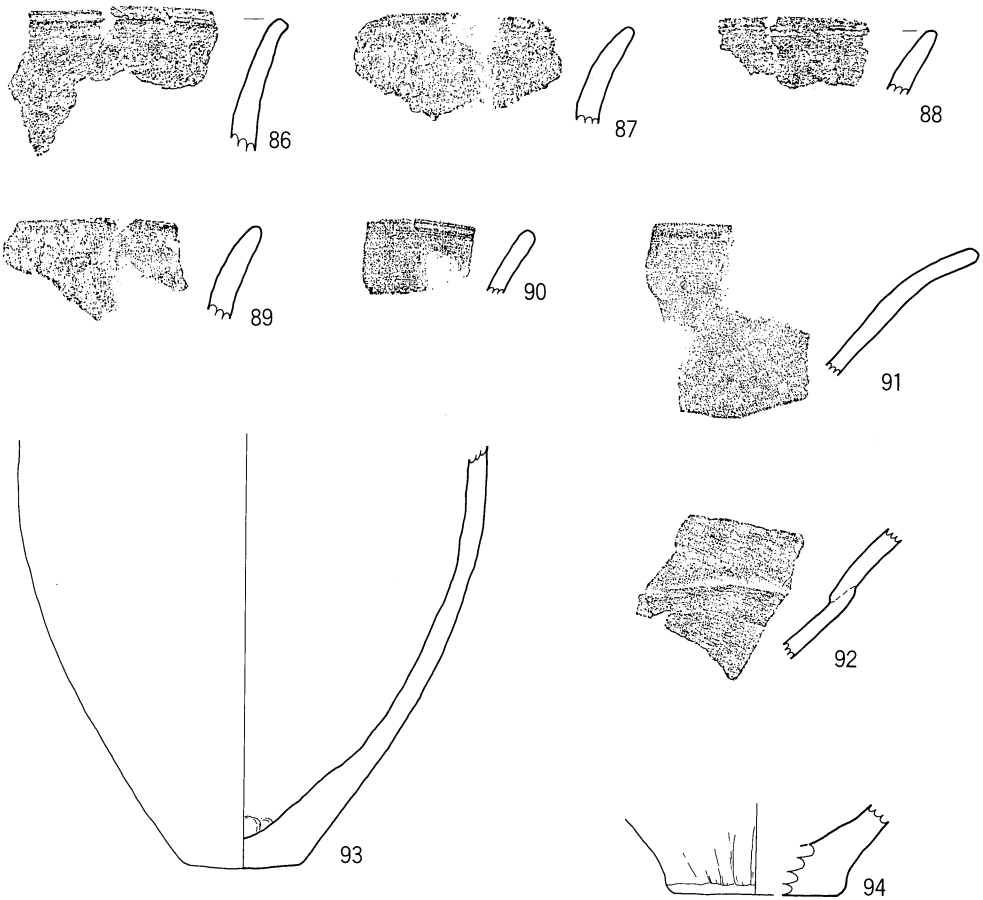
83. 84. 85は突帯付近の破片であるが、82とは形状が異なる。

86. 87. 88. 89. 90は甕形土器の口縁部破片、91. 92は高坏の口縁部、屈曲部付近の破片とおもわれるが、脚部は出土していない。93は甕形土器の胴部から底部にかけて、81と同形にちかいものとなるか。

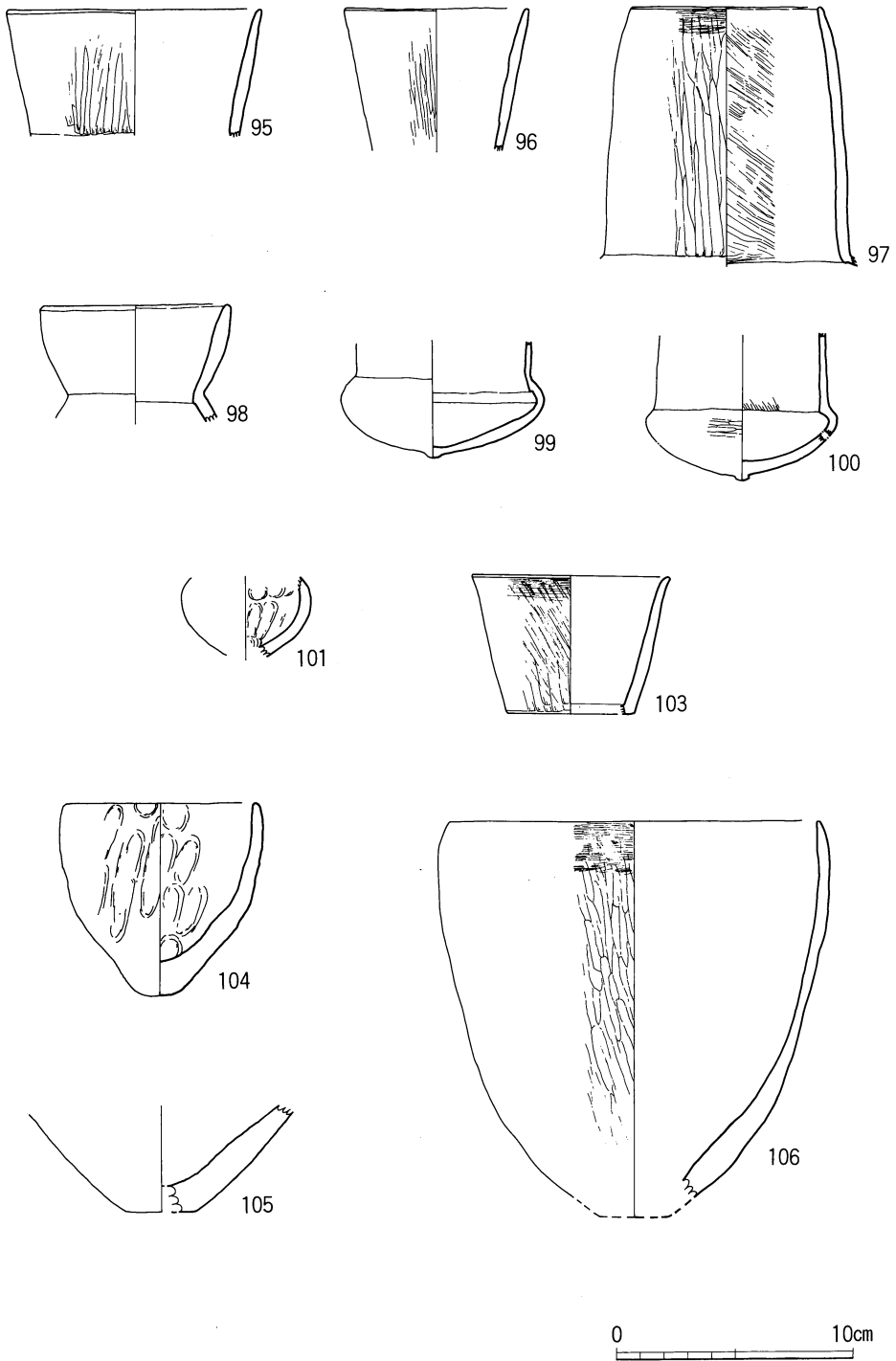
95. 96. 97. 98. 99. 100. 102は罎形土器となろう。97は長頸形の罎になるか、口縁が内向するのが特徴となる。外面は口縁端部付近がミガキのあとナデ調整となる外は、遺存部すべてタテ方向のミガキ調整となる。灰白色を呈する。99. 100. 102は小型丸底罎となる。胴部は偏球状となり底部がボタン状になる。100でみるように口縁はほとんど外反しないタイプか。丁寧なナデ調整である。103は極めて薄手につくられたコップ状の小形土器である。タテ方向のヘラナデの上を斜方向にハケによるナデ調整をおこなっている。106は口縁端部付近からやや内湾する鉢形土器。外面にヘラによる丁寧なナデ調整がみられるのが特徴である。内面はタテ方向のナデ調整となる。104は小形鉢、内外面、手捏ね仕上げとなる。



第24图 BK区出土遺物実測図(1/3)



第25图 BK区出土遗物实测图(1/3)



第26图 BK区出土遗物实测图(1/3)

第4節 C区調査の概要

C区は生活道を挟んで二地区に分けられる。全域が宅地であったため、所々に基本土層に攪乱がみられる。基本土層は御池ボラ層をはさんだ明瞭なもので、北から南に緩傾斜している。遺構は発掘区西端に竪穴住居跡（2号竪穴住居）を検出した。

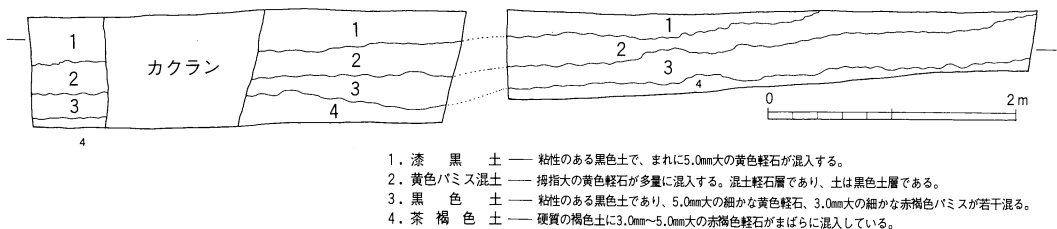
1. 遺構

2号竪穴住居（第26図）

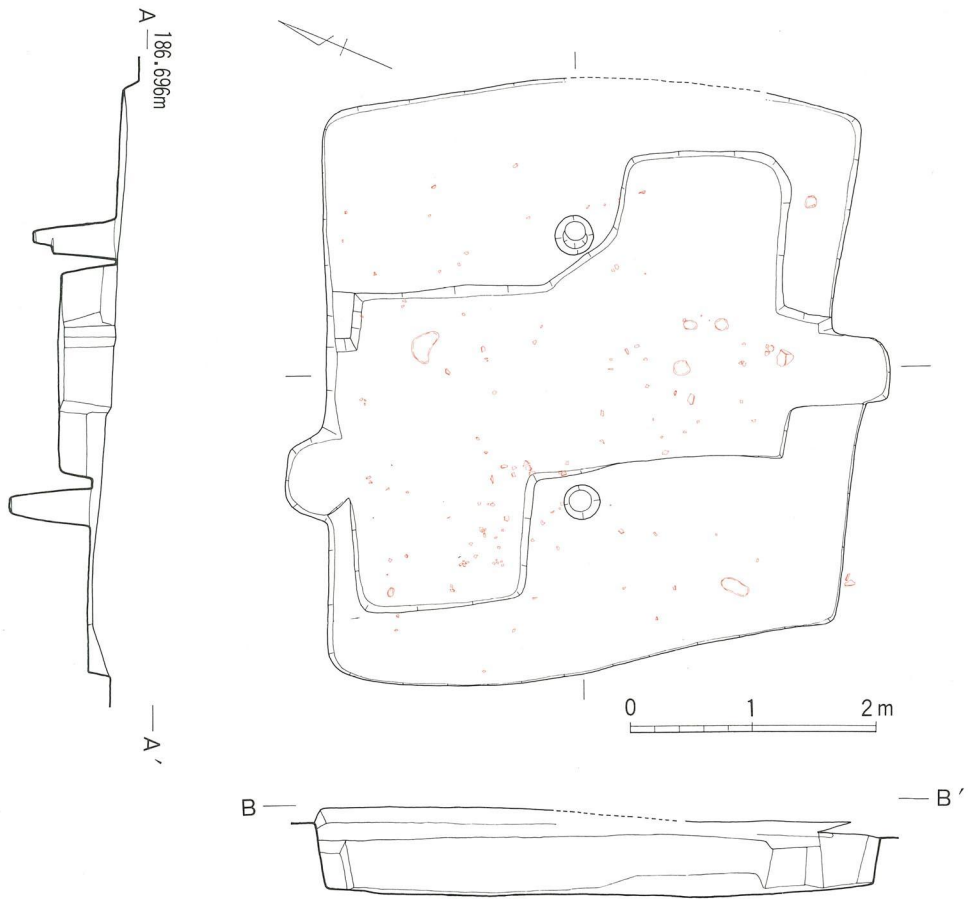
東西4.2m、南北4.6mのおよそ正方形プランに、南北両辺の中央部付近の外側に凸状に張り出した小区画を設ける竪穴住居址である。住居埋土は黒褐色土に御池ボラがまばらに混じり込むもので、周辺の土層境とは御池ボラの混入具合によって分別できるものである。

住居址の埋土であるにもかかわらず、土壌のしまり具合は極めて堅く、土層の断面を逐一確認しなければ埋土を排除することはできなかった。

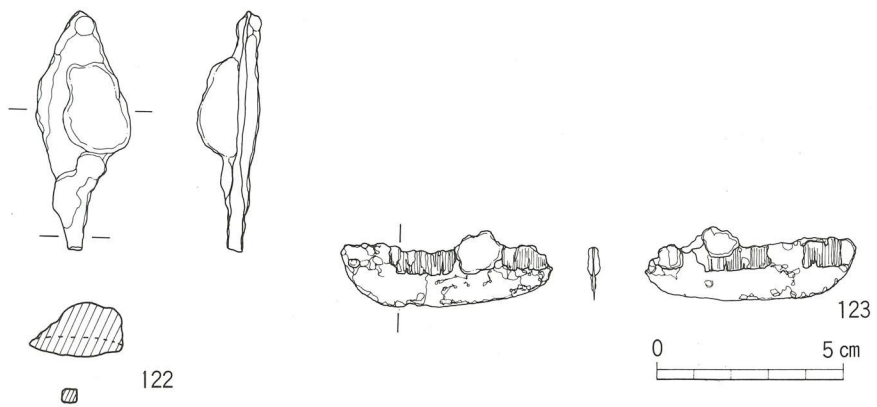
方形住居内は、ボラ面から深さ50mで鍵状に掘り込まれた内区画を設けている。この区画のために、東側と西側には先の床面から約30cm高まって約4㎡のベッド状の区画が造り出されて、相当スペースを提供している。先述の突出部は北辺のもので幅60cmをもって40cm突出するもので、南辺のものはやや小振りである。この突出部は北辺、南辺のものでは必ずしも対応せず、北辺のものは中央よりやや西にずれている。深さは鍵状区画と同じレベル面までおよび、段差を設けない。ベッド状の高まり部に、それぞれ一ヶ所づつの柱穴が鍵状区画より検出された。掘方はそれぞれ円形で、P1は直径31cm、深さ52cm、P2は直径28cm、深さ65cmを計測する。



第27図 C区土層断面図



第28图 2号竖穴住居实测图



第29图 2号竖穴住居出土铁器实测图

2. 遺構

2号竪穴住居出土遺物

第28図は2号竪穴住居より出土した土器片、石器を、第27図は鉄器を掲載した。土器は小破片が多く完形に近く復元できたものは無い。

土師器

107～117は甕形土器の口縁、あるいは突帯部片である。107、110は口辺が内湾気味となつて、他と器形を異にする甕か、117は太い突帯に鋭い刻目が入る突帯部付近の破片である。114はよくヘラミガキされた埴形土器の胴部片であろう。115は高坏の坏部の段にあたるどころか、118はやや尖り気味の底部で比較的小形の甕形土器の底部となろう。

石器

119は上下端に遺痕の残る頁岩製の敲石である。120は台石、あるいは敲石としても使用されたと考えられる石器である。石材は表面に細かな凹凸のある粗い凝灰岩である。

121は上下端が平滑な石皿である。石材は14に同じ。

鉄鏃 (第27図122)

柳葉形を呈する鉄鏃。鏃身と茎部遺存部をあわせた全長6.3cm、最大幅3.3cm、厚さ(約0.5cm)を計測する。断面形は両丸造、あるいは平造と推定される。茎部の断面形は正方形で厚さ3.5mm。

鉄製品 (第27図123)

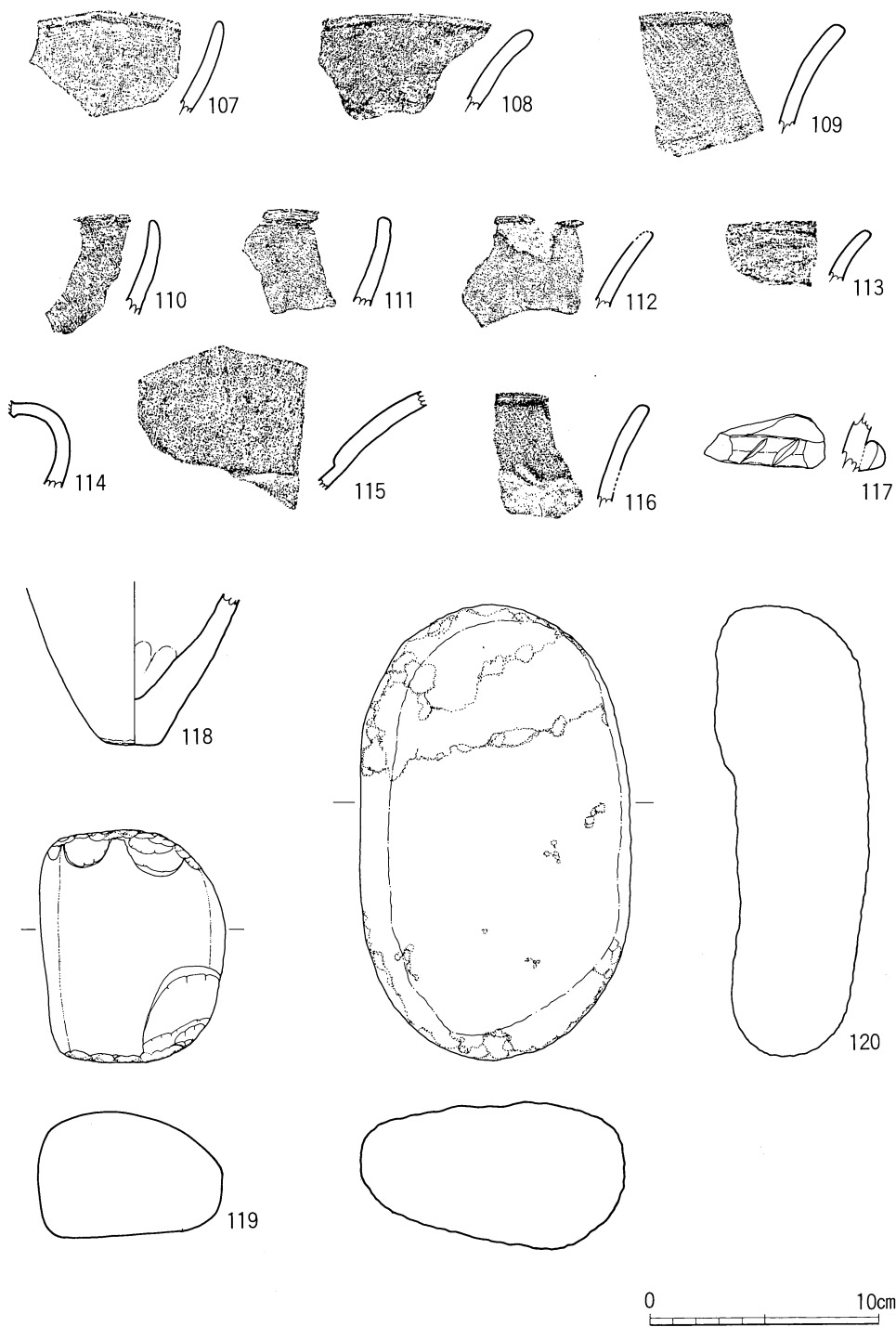
123は、現存長5.6cm、現存最大幅1.9cm、刃部厚0.5cmの用途不明鉄製品、金属部はカミソリの刃のように薄く造られ、刃部上端側に木質が遺存している、木製柄に装着された刃物であろう。

C区出土土器 (第29・30図)

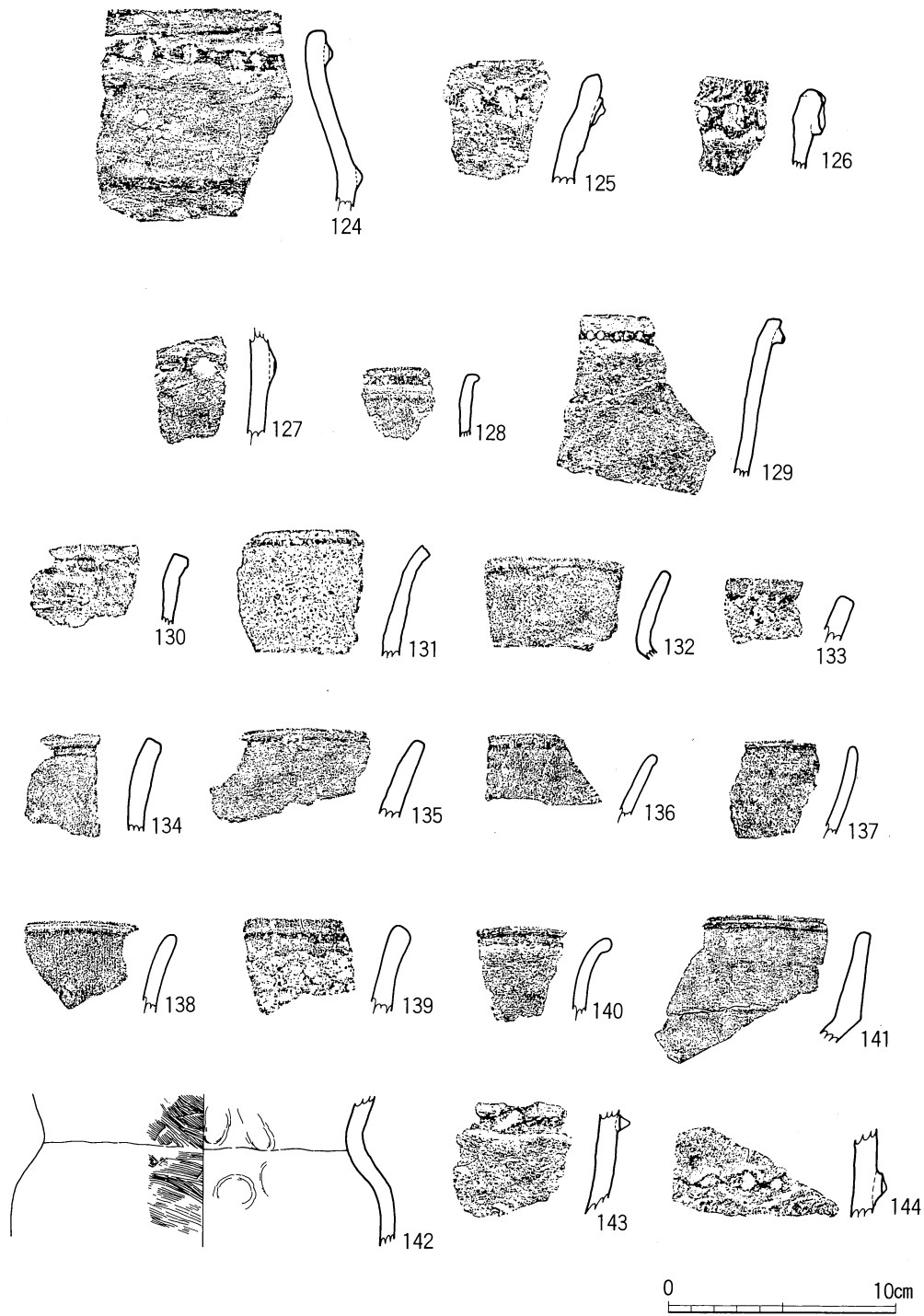
いずれも、遺構、プライマリーな包含層に伴うものではない。124～129は突帯文土器である。124は口縁端直下に低い刻目突帯が巡り、無文域をはさんで屈曲部に二条目の刻目突帯が巡る。

内外面とも粗いナデ調整がある。明灰褐色を呈している。

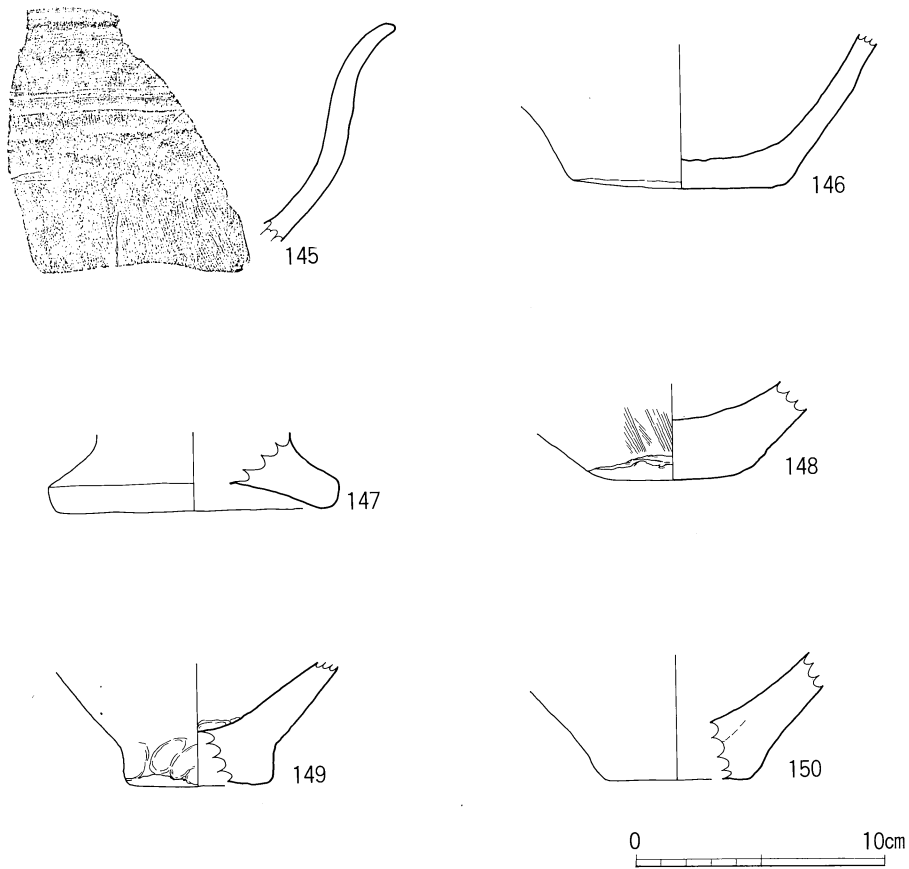
129には断面三角の突帯に細かな刻目突帯がつく。124～127とは時期を異にする弥生前期頃のものか。



第30图 2号竖穴住居出土遗物实测图(1/3)



第31图 C区出土遗物实测图



第32図 C区出土遺物実測図

第5節 まとめ

本遺跡において生活の足跡がしるされるのは、A発掘区で出土した3点の曾畑土器によってしめされる縄文前期が最初である。また、縄文後期前半～後半にかけては沈線文土器、貝殻文土器の散発的出土によって、ある程度短期の生業の場としての足跡をうかがうことができる。前年度の調査によって検出された免田式の長頸壺によって弥生時代後期以降にいたって初めて人々の定住化が促進されたとおもわれ、以後古墳時代をつうじて居住域とされ、古代の空白期において、中世から近世にかけて再び人々の営みの跡を残している。本遺跡の主要な遺構となった竪穴住居跡は、前年度調査によってすでに明らかとなっていた一軒とあわせて三軒となった。土取りなどの破壊によって十分に窺い知ることのできなかつた区域等も考慮するとB. C区域に営まれた集落は四. 五軒と推定されこれをおおきく越えるものではなかろう。三軒のうちの一軒は全容が明らかなもので、この地域における古墳時代の住居形態の一例を示すものとなった。住居内に鍵状の掘り込みと、それとともなって必然的に生じるベッド状の居住空間は、生業とのかかわりによって、なんらかの機能的な役割をになって

案出されたものであろうが、実証できる遺物や遺構を欠いている。しかし、鉄鏝、用途不明の鉄製品の出土はその機能についてなんらかの示唆をあたえてくれるものかもしれない。地形的にみれば清流、高崎川を身近にのぞむ環境は河川との深いかわりを想定させるもので、高崎川に沿って形成された沖積地は現在もそうであるように水田耕作には好条件下にある。しかし、A区にみられたように数枚の砂層と礫層は幾たびも流路を変える荒川としての高崎川の一面を示しており、現代の河川改修のゆきとどいた河川の景観から過去の表情を推し量るには大きな危険を伴うであろう。また、なによりも霧島に代表される火山地帯である当地方の自然環境、土壌の条件は農耕にとって苛酷なものであったろうと思われる。弥生土器包含層直上には劇的に降下堆積した火山灰層、軽石層が少なくとも二枚、それ以下では御池ボラ、赤ホヤ火山灰層をはじめとして少なくとも3枚以上がみられ霧島系火山による層序にあらわれない小規模な火山灰降下によっても、農作物に与えた被害は甚大であることは、現在の例をひくまでもなくあきらかである。このような低生産性の自然条件のもとで営まれた当地の生活をなお十分に復元するにあたっては、火山灰層に覆われて埋没している可能性のある主要な生業の場としての古水田跡の調査が不可欠であるが、それは住居跡より約4m下位方にひらけた沖積地に予想され、その全容があきらかになってはじめて集落としての全体像を明らかにすことができよう。

石器は、1号住居の近辺から出土したいわゆる有肩打製石斧の折損した一点、2号住居の石皿（台石）、および上下端に潰痕と剝離痕のある敲石が出土したが、具体的な生業活動を窺い知るにはなお不十分であった。主体的に出土したといえる土器はないが、高崎川とのかわりあいから漁撈にかかわる遺物、たとえば礫石錘の出土が想定されたのであるが、住居跡内はもちろんのこと表土中からも皆無であったことも、逆に抽出されねばならない事実のひとつである。

C区で検出した1号住居は方形プランで二本主柱を有し、内区画にクランク状の掘り込みと、それによって必然的に生じるベッド状の高床施設を有している。いはゆる突出する土壁によって空間を仕切る間仕切り住居とは一線を画する住居内の空間利用の一例であり、本県では初例の石野博信氏分類(註)の方形12形にあたる。2号住居跡出土の遺物は、偏平丸底の小型の精製壺、鉄製穂刈具、柳葉式鉄鏝などからなる。このうち、偏平丸底小型精製壺は、垂直に立つ口縁と極めて偏平な丸底にボタン状の突起のつく特徴あるもので、鹿児島県から諸県地方を中心に分布する形態である。卑近な例では、えびの市小木原地下式横穴墓からも一括して出土している。これらは、4世紀後半に比定しておきたい。

(註) 石野博信 ‘弥生・古墳時代住居の屋内区分施設’ 檀原考古学研究所論集 第10集

昭和36年

観 察 表

図面 番号	遺物 番号	器 種	器 部	文 様 お よ び 調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
22	81	甗	口 縁 ～ 底部付近	タテ 斜ハケメ タテナデ ヨコナデ	斜ハケメ ナデ ヨコナデ	良好	にぶい橙色 (7.5Y R 7/4) にぶい褐色 (7.5Y R 5/3)	灰褐色 (5Y R 5/2) にぶい橙色 (5Y R 6/4)	透明、黒色の光るガラ ス質の細片多く、0.5～ 1mmの灰、茶色の細粒 多く含む	内、外面スス付着
22	82	甗	口 縁			良好	浅黄橙色 (7.5Y R 8/3)	浅黄橙色 (7.5Y R 8/3)	1mm大の黒色の光るガ ラス質の細片、1～2 mm大の茶、褐灰の砂粒 多く含む	貼付斜刻目突帯
22	83	甗	胴 部	ヨコナデ 斜ハケメ	指調整 ナデ 斜ハケメ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	光るガラス質の細片、 0.5～1mmの茶、灰色の 砂粒含む	貼付斜刻目突帯
22	84	甗	胴 部	ヨコナデ ヨコハケメ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	黒く光る細角片、半透 明のガラス質の細片、 0.5～2mm前後の灰褐、 灰色の砂粒含む	貼付突帯
22	85	甗	胴 部	ヨコナデ	ナデ	良好	灰黄色 (2.5Y 7/2)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	黒く光るガラス質の細 片、0.5mm前後の灰白、 黒色の砂粒含む	内、外面スス付着 貼付刻目突帯
23	86	甗	口 縁	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3) 灰白色 (2.5Y 7/1)	浅黄橙色 (10Y R 8/3)	黒く光る、半透明のガ ラス質の細片少々、0.5 ～2mm大の褐色の砂粒 含む	外面スス付着
23	87	甗	口 縁	ナデ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	光るガラス質の細片、 0.5～2mm大の褐、黒色 の砂粒多く含む	
23	88	甗	口 縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	0.5～1mmの灰褐、灰色 の砂粒含む	外面スス付着
23	89	甗	口 縁	ヨコナデ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3) 褐灰色 (10Y R 5/1)	浅黄橙色 (10Y R 8/3)	0.5～2mm大の灰褐色の 砂粒含む	
23	90	甗	口 縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/2)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	0.5mm前後の灰色の砂 粒含む	内、外面スス付着
23	91	高 環	環 部	ヨコナデ ナデ 斜ハケメ	ヨコハケメ ヨコナデ ナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/2)	透明で、光るガラス質 の細片、細砂粒含む	外面風化
23	92	高 環	環 底 部	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい橙色 (7.5Y R 7/3) 明褐色 (7.5Y R 7/2)	にぶい橙色 (7.5Y R 7/3)	光るガラス質の細片、 0.5～2mmの灰色の砂粒 含む	外面風化 内面スス付着
23	93	甗	胴 部 ～ 底 部	ナデ	ナデ 指調整	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/4) 褐灰色 (10Y R 5/1)	ガラス質で光る角質の 細片、1～2mm大の黒、 灰、茶色の砂粒多く含 む	内、外面、胴部風化 外面スス付着
23	94	甗	底 部	タテハラナデ ナデ	ハラナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3) 淡褐色 (5Y R 5/4)	灰白色 (2.5Y 8/1)	黒く光るガラス質の細 片、半透明のガラス質 の細片少々、1mm前後 の灰、黒褐色の砂粒含む	
24	95	壺	口 縁 ～ 頸 部	タテハラミガキ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	きめ細やか、光る微粒 子、0.5～2mm前後の砂 粒含む	内、外面、口唇部 風化
24	96	壺	口 縁	ヨコナデ タテハラミガキ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	きめ細やか、光る微粒 子、細砂粒含む	口唇部風化
24	97	長頸壺	口 縁 ～ 頸 部	タテミガキ ヨコナデ	斜ハケメ ヨコナデ	良好	灰白色 (2.5Y 7/4)	灰白色 (2.5Y 7/4)	きめ細やか、光る微粒 子、細砂粒含む	外面風化
24	98	壺	口 縁 ～ 頸 部	ナデ ヨコナデ	ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	きめ細やか、ガラス質 の細片、0.5mmの茶色 の細砂粒含む	外面スス付着
24	99	小 型 丸底壺	頸 部 ～ 底 部	ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3) 淡黄褐色 (7.5Y R 8/3)	淡黄色 (2.5Y R 8/3)	きめ細やか、細砂粒含 む	内、外面、下方部 風化
24	100	小 型 丸底壺	頸 部 ～ 底 部	ヨコナデ 丁寧なナデ ミガキ?	ヨコナデ ナデ 斜ハケメ	良好	灰黄色 (2.5Y 7/2)	灰黄色 (2.5Y 7/2)	きめ細やか、光る微粒 子、1mm前後の茶色 の砂粒少々含む	図上復元

観 察 表

図面 番号	遺物 番号	器 種	器 部	文 様 お よ び 調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
24	101	ミニチュア	肩部 ～ 底部付近	丁寧なナデ	指調整	良好	にぶい橙色 (5Y R 6/4) にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	光るガラス質の細片、 細砂粒含む	外面スス付着
24	103	鉢	口縁 ～ 底部	ヘラナデ ハケによる ナデ	ヨコナデ	良好	にぶい橙色 (5Y R 6/4)	橙色 (5Y R 6/6)	黒、透明の光るガラス 質の細片、0.5mm前後の 灰色の砂粒含む	内面スス付着
24	104	小鉢 (半完形)	口縁 ～ 底部	指調整	指調整	良好	淡黄色 (2.5Y 7/3) にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	淡黄色 (2.5Y 7/3)	透明のガラス質の細片 0.5～2mmの灰褐色の砂粒 多く含む	内、外面ヒビ割れ
24	105	鉢	底部	丁寧なナデ	斜ナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) 褐色 (10Y R 4/1)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) 褐色 (10Y R 4/1)	0.5～2mm前後の灰白、 黒色の砂粒含む	106と同一個体で 図上復元
24	106	鉢 (半完形)	口縁 ～ 底部付近	ヨコナデ 斜方向に丁寧 なヘラナデ	ヨコナデ タテナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) 褐色 (10Y R 6/1)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) 褐色 (10Y R 6/1)	0.5～2mm前後の灰白、 黒、茶色の砂粒多く含 む	105と同一個体で 図上復元、 外面黒斑
28	107	鉢あるいは 甕	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	極めて細かな微砂粒	
28	108	甕	口縁	丁寧なナデ	磨き	極めて 良好	にぶい橙色 (5Y R 6/4)	にぶい橙色 (5Y R 6/4)	石英(ときに1.0mm大)、 長石、微砂粒を含む	外面にスス付着
28	109	高坏か	口縁	風化 (ミガキか)	風化	良好	淡黄色 (2.5Y 7/3)	同 左	石英、角閃石、砂	
28	110	鉢か甕	口縁	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	にぶい橙色 (5Y R 6/4)	同 左	0.5mm大の灰、褐色の砂 粒含む	
28	111	甕	口縁	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	にぶい橙色 (5Y R 6/4)	同 左	0.5mm大の灰色の砂粒 含む	
28	112	高坏か	口縁	丁寧なナデ	丁寧なナデ	極めて 良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	同 左	精選されて極めて微粒	
28	113	甕	口縁	風化	風化	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	同 左	1.0mm大の茶砂粒、石英 2.0mm大のチャートを 多く含む	
28	114	小 柑	胴部	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良好	淡黄色 (2.5Y 8/3)	同 左	細砂粒を含む	
28	115	高 坏	坏部	風化	風化	良好	淡黄色 (2.5Y 8/4)	淡橙色 (5Y R 8/4)	精良である。	
28	116	甕 か	口縁	風化	ミガキ	硬	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	同 左	石英、長石、砂粒、精 選されて極めて微粒	
28	117	甕	口縁付近 突帯部	——	ナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	同 左	黒灰色砂粒2.0mm大が 多い、2.0mm大の茶赤 粒、石英	
28	118	甕	底部	ナデ	ナデ 指頭圧痕	良好	淡黄色 (5Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	1.0～2.0mm大の角礫粒 を多く含む	
29	124	甕	口縁	粗いナデ	粗いナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	灰黄褐色 (10Y R 6/2)	きめ細やか、透明、半 透明の細片含む	外面スス付着
29	125	甕	口縁	ヨコナデ	ヘラナデ	良好	灰黄褐色 (10Y R 6/2)	灰黄褐色 (10Y R 6/2)	透明で光るガラス質の 細片、0.5～1mmの茶、 灰黄色の砂粒含む	外面スス付着 貼付刻目突帯
29	126	甕	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	良好	明褐色 (7.5Y R 7/2)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	透明で光るガラス質の 細片、0.5～1mm大の黒 灰黄色の砂粒含む	外面スス付着 突帯?

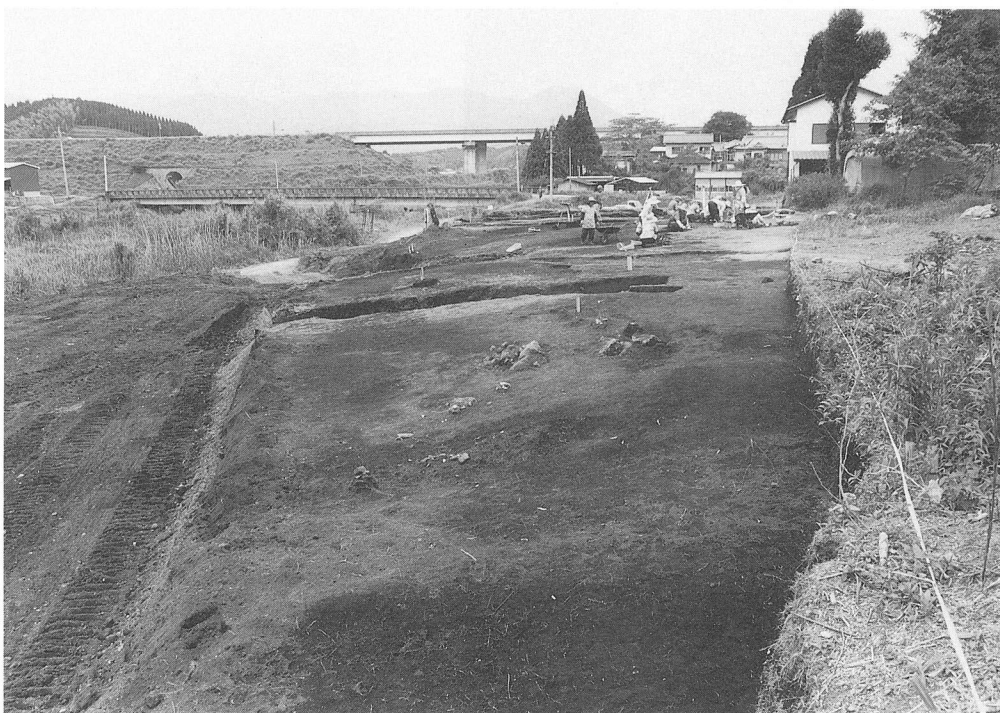
観 察 表

図面 番号	遺物 番号	器 種	器 部	文 様 お よ び 調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
29	127	甕	口 縁	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐色 (10Y R 6/2)	にぶい褐色 (7.5Y R 5/3)	1.0mm大、石英、長石、砂粒多く含む	刻目突帯
29	128	甕	口 縁	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい橙色 (5 Y R 6/4)	にぶい橙色 (7.5 Y R 6/4)	透明、黒く光るガラス質の細片少々、0.5~1mmの褐色の砂粒含む	内面風化
29	129	甕	口 縁	ヨコナデ ナデ	ナデ	良好	灰褐色 (5 Y R 5/2) 褐灰色 (7.5 Y R 4/1)	にぶい褐色 (7.5Y R 5/3-6/3)	透明で光るガラス質の細片、半透明のガラス質の細片、0.5mm大の褐色の砂粒含む	外面スス付着 貼付刻目突帯
29	130	甕	口 縁	ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	スス付着	にぶい褐色 (7.5 Y R 5/3)	1mmの褐色の砂粒含む	内・外面スス付着
29	131	甕	口 縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい橙色 (5 Y R 7/4) 灰黄褐色 (10Y R 6/2)	にぶい黄橙色 (10Y R 6/3)	1~2mm前後の灰、褐色の砂粒含む	外面スス付着 風化
29	132	甕	口 縁	——	ナデ	良好	淡赤橙色 (2.5Y R 7/4)	にぶい橙色 (5 Y R 7/4)	光る微粒子、0.5mmの白、灰色の細砂粒含む	内・外面風化
29	134	甕	口 縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい橙色 (7.5Y R 7/3)	にぶい褐色 (7.5Y R 7/3)	0.5~1mmの灰白、褐色の砂粒含む	
29	135	甕	口 縁	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/4)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/4)	黒く光るガラス質の細片、0.5mmの黒褐、灰色の細砂粒含む	外面スス付着
29	141		口 縁	ミガキ	ヨコ・斜・タテ ミガキ	良好	にぶい橙色 (7.5Y R 7/4)	にぶい褐色 (7.5Y R 7/4) 褐灰色 (7.5Y R 5/1)	0.5mm前後の灰、茶色の砂粒含む	
29	142		頸部 ~ 肩部	斜ハケメ	ナデ、指調整	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	透明で光るガラス質の細片、0.5mm前後の灰、茶色の砂粒含む	
29	143		胴 部	ナデ	斜ハケメ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙色 (10Y R 7/4)	透明で光るガラス質の細片、半透明のガラス質の細片、0.5~1mm大の灰褐、灰白色の砂粒含む	外面スス付着 貼付刻目突帯
29	144		胴 部	ナデ	ヘラナデ	良好	にぶい黄橙色 (10Y R 7/3) 褐灰色 (7.5Y R 5/1)	明褐灰色 (7.5Y R 7/2)	透明で光るガラス質の細片、0.5~1mm大の灰、茶色の砂粒含む	外面スス付着 貼付刻目突帯
29	145		口 縁	ヨコナデ タテ斜ハケメ	ヨコナデ ヨコハケメ	良好	にぶい褐色 (7.5Y R 6/3)	にぶい黄褐色 (10Y R 7/2)	きめ細やか、1mmのガラス質の細片含む	
29	146		底 部	ナデ	——	良好	褐灰色 (5 Y R 5/3) 灰黄褐色 (10Y R 6/2)	褐灰色 (5 Y R 4/1) 灰黄褐色 (10Y R 6/2)	黒、透明の光るガラス質の細片、半透明のガラス質の細片、0.5~1mm大の茶褐、灰色の砂粒含む	内面風化 外底面スス付着
29	147		底 部	ナデ	——	良好	にぶい赤褐色 (5 Y R 5/3)	黄灰色 (2.5Y 5/1)	光る微粒子、0.5~1mm大の茶、灰色の砂粒含む	あげ底 外面風化
29	148		底 部	斜ハケメ ナデ	指調整、ハケ によるナデ	良好	にぶい橙色 (5 Y R 6/3)	にぶい黄褐色 (10Y R 7/2) 褐灰色 (10Y R 4/1)	半透明のガラス質の細片、0.5~2mmの灰白色の砂粒含む	外面スス付着
29	149		底 部	ヘラナデ 指調整	ヘラナデ 指調整	良好	灰褐色 (7.5Y R 6/2)	灰褐色 (5 Y R 5/2)	黒、透明で光るガラス質の細片、0.5~1mm大の灰、褐色の砂粒、3mm大の粒含む	内・外面スス付着
29	150		底 部	ナデ ヨコナデ	ナデ	良好	灰白色 (2.5Y 8/2)	灰白色 (2.5Y 8/2) 黄灰色 (2.5Y 1-6/2)	光るガラス質の細片、1~2mmの灰、黒色の砂粒、3mm大の粒含む	

圖 版



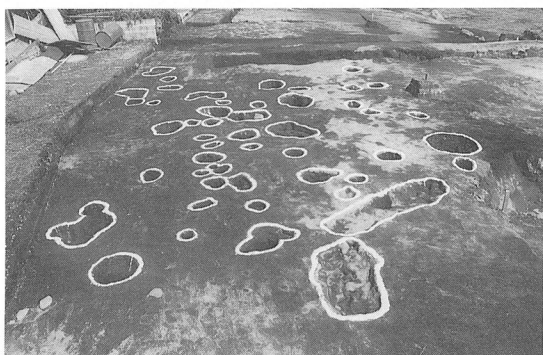
A区 発掘前の現況



A区 発掘後の状態



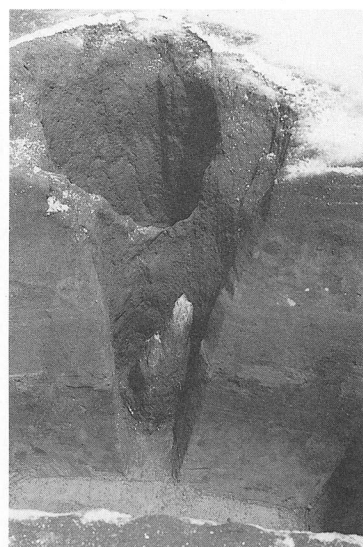
A区 発掘状況



A区 柱穴群



柱根を残すピット (P一)



柱根 (P一)



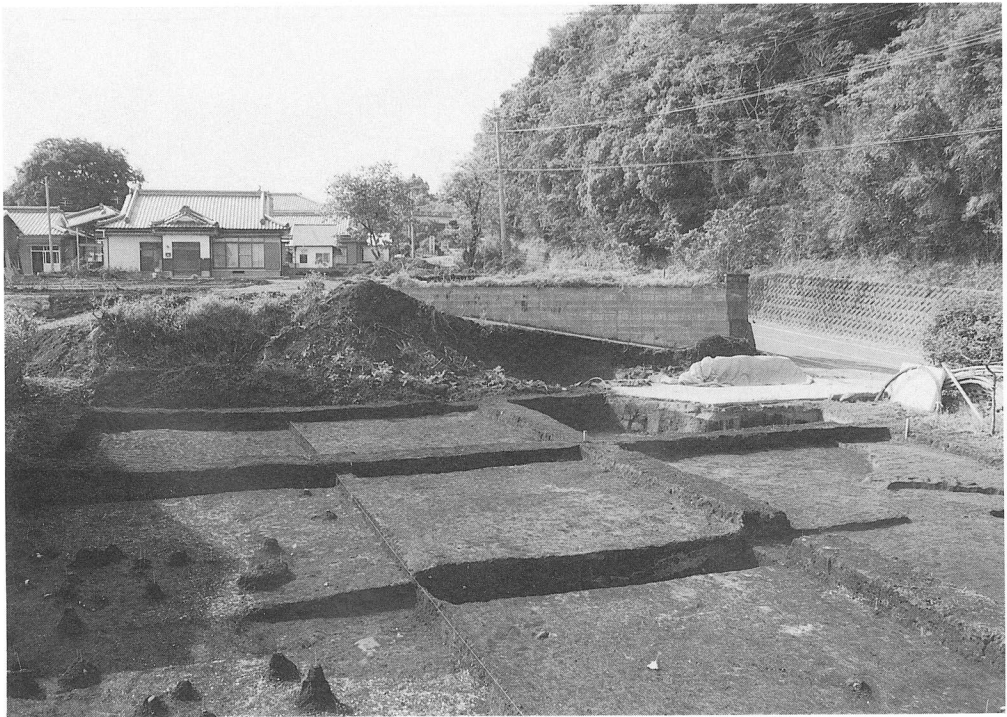
曾畑式土器出土状況



A区 発掘状況



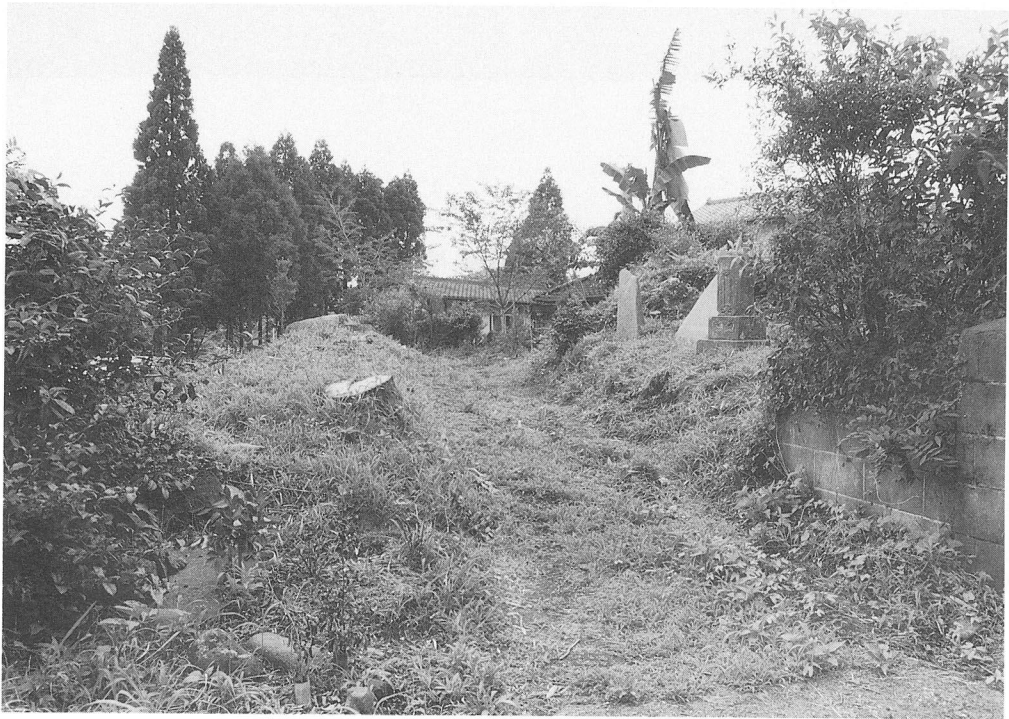
高崎城跡（小高い丘地）



B区の状況



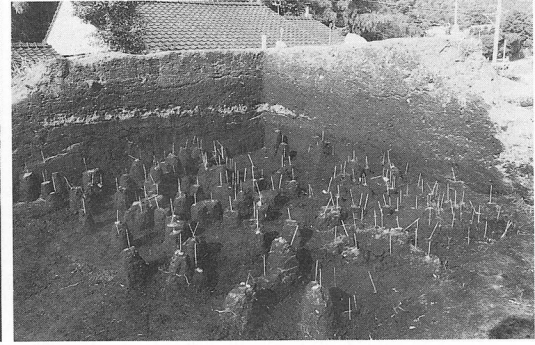
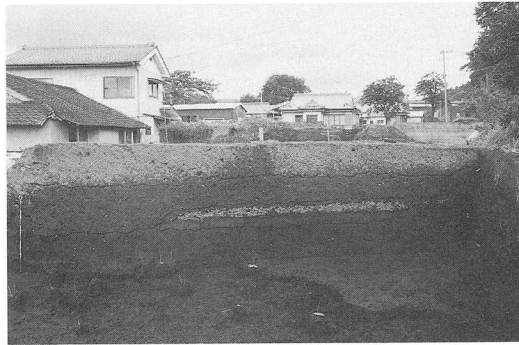
B区 土層堆積状況（最下層—アカホヤ火山灰）



旧街道のおもかげをのこすBK区の状況



発掘前の状況



B K区 発掘状況



BK区 近世墓



宝暦年間の墓石



大日如来 (アーク)



享保年間の墓石



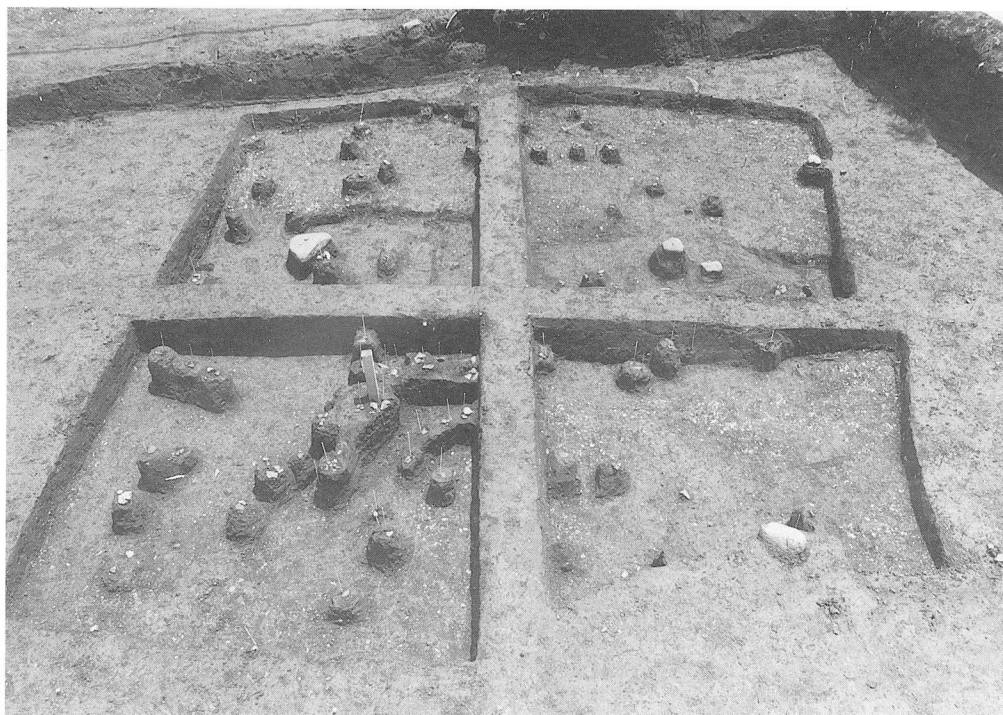
大日如来 (アーク)



C区 発掘状況



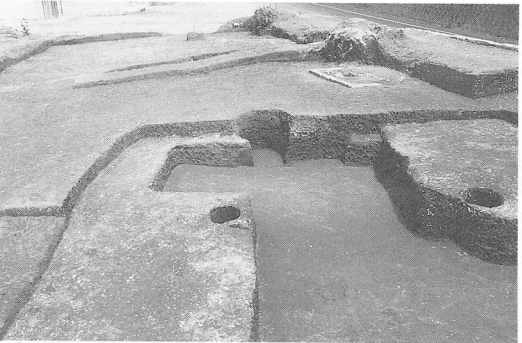
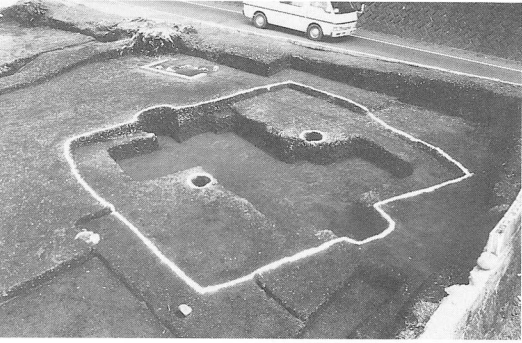
2号竪穴住居発掘状況



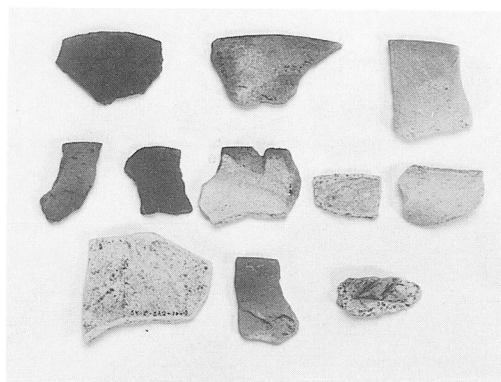
2号竖穴住居遺物出土状況（C区）



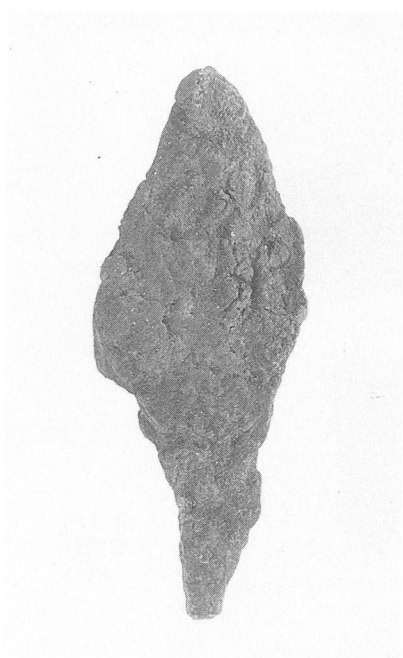
1号竖穴住居遺物出土状況（B区）



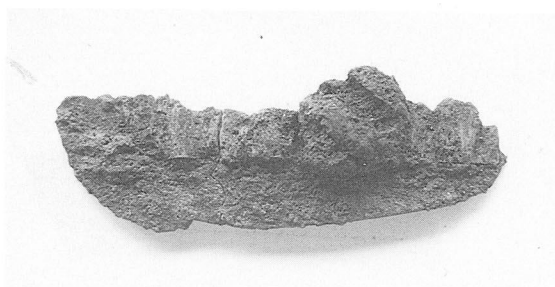
2号豎穴住居



土師器



柳葉形鉄鏃



鉄製品



敲石と台石

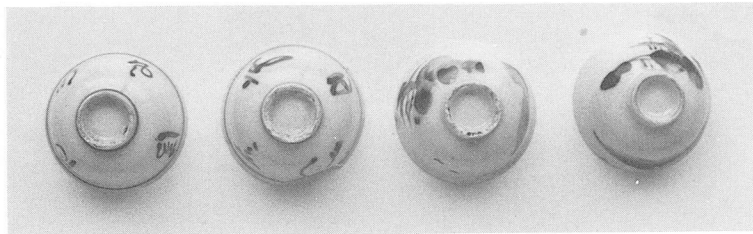
2号竪穴住居出土遺物（C区）



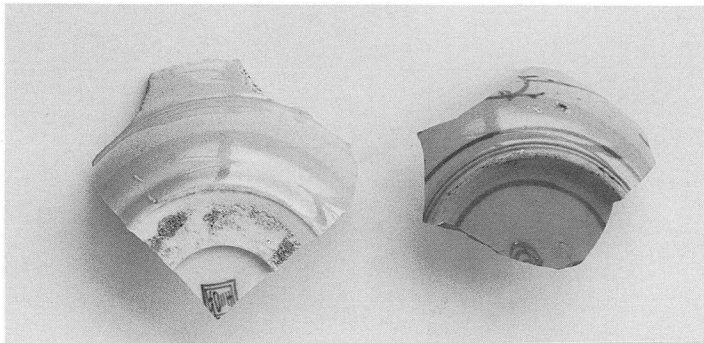
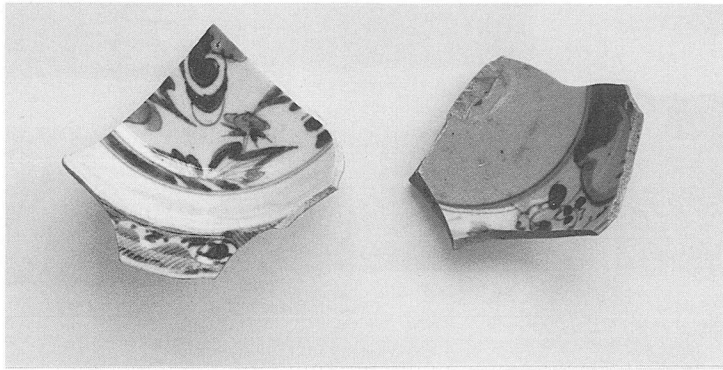
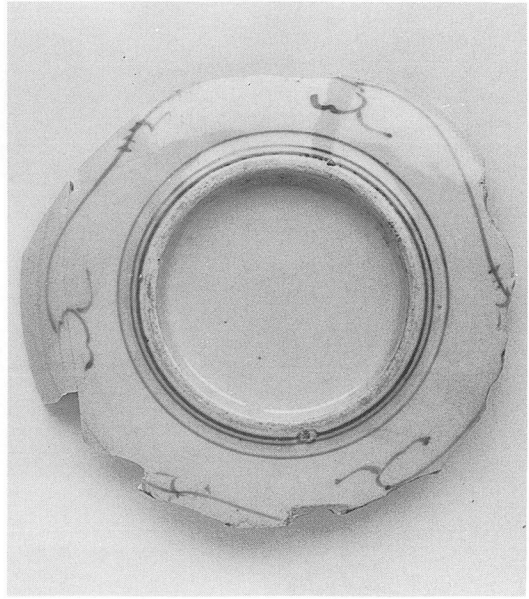
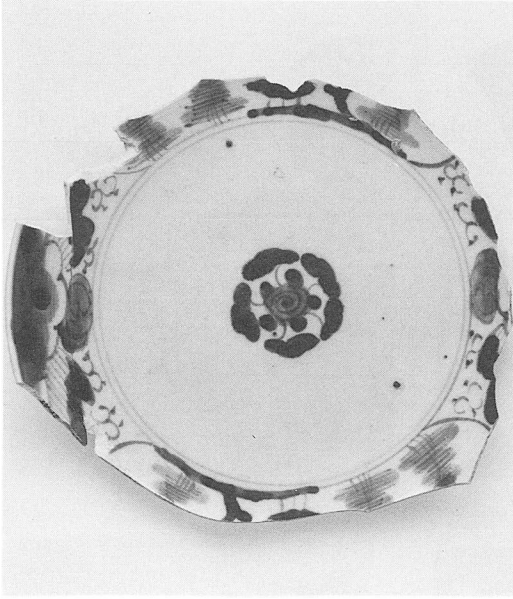
BK区出土
の遺物



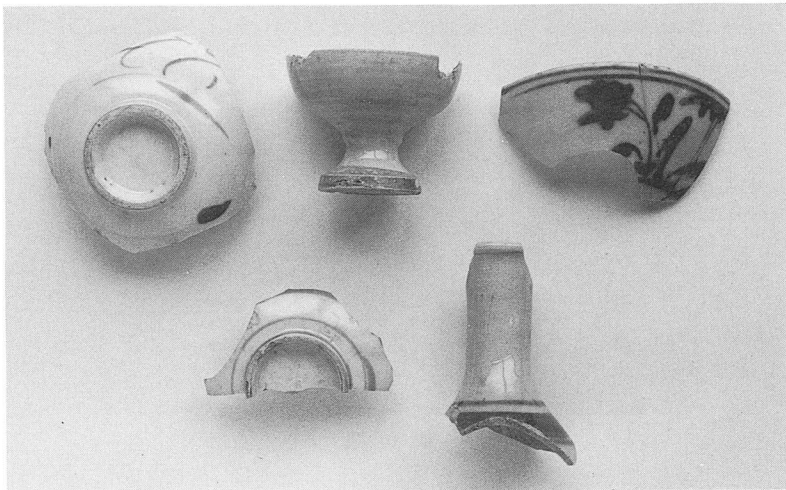
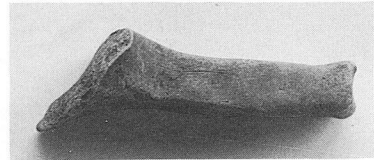
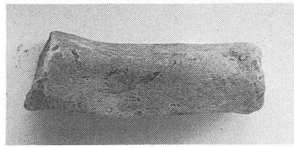
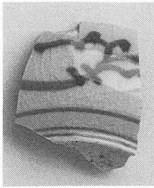
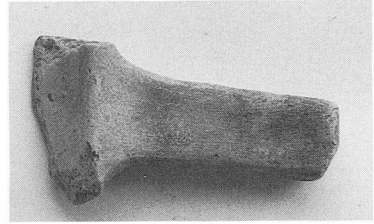
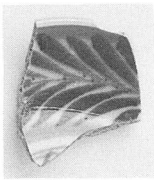
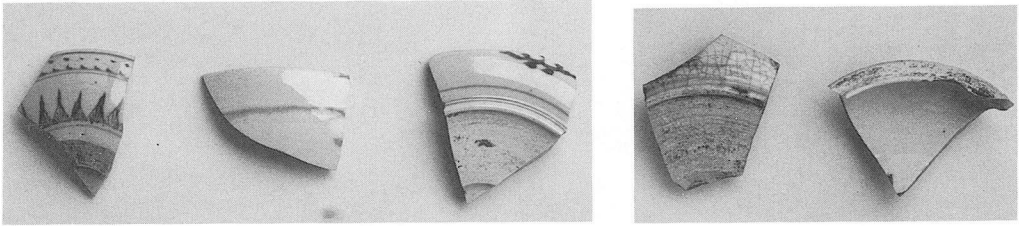
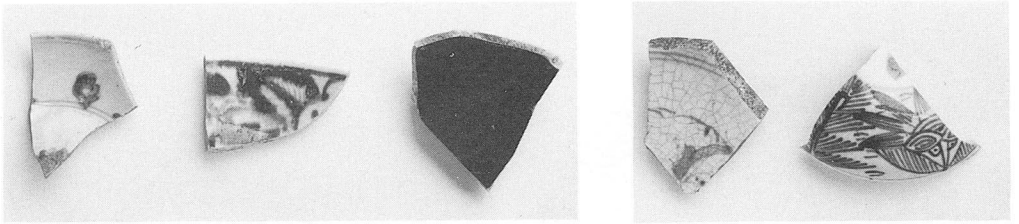
把手付
素焼皿
(A区)



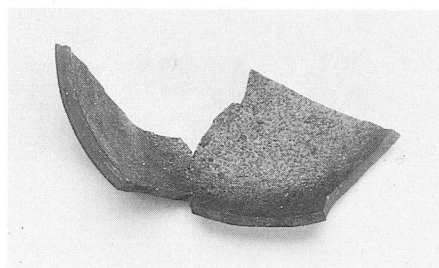
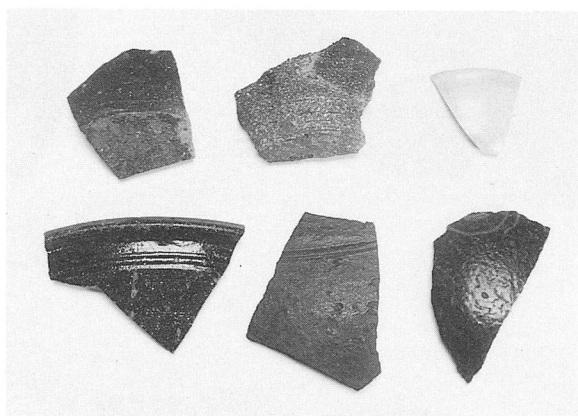
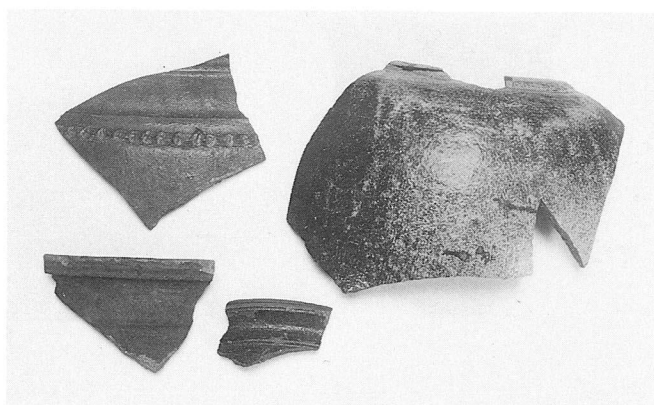
小坏
(A区)



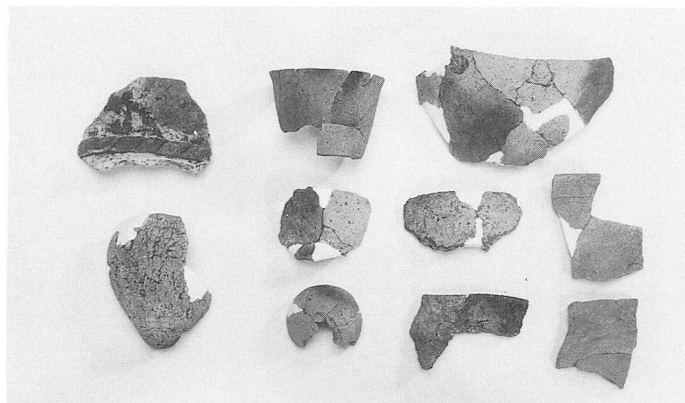
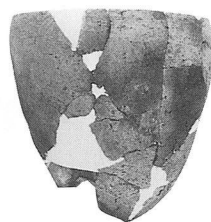
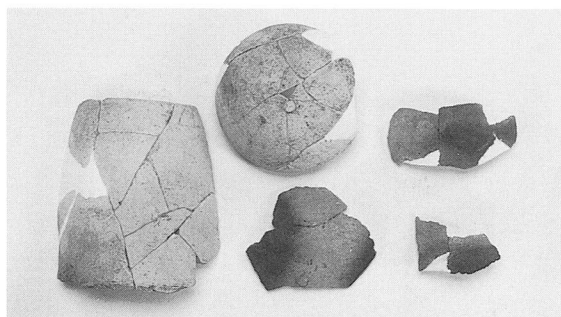
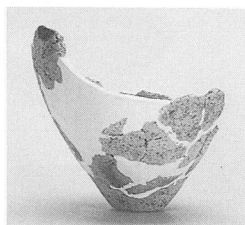
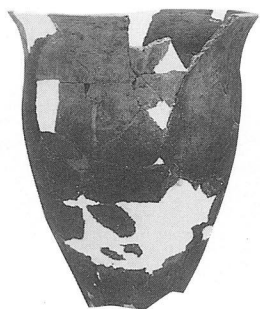
染付皿 (A区)



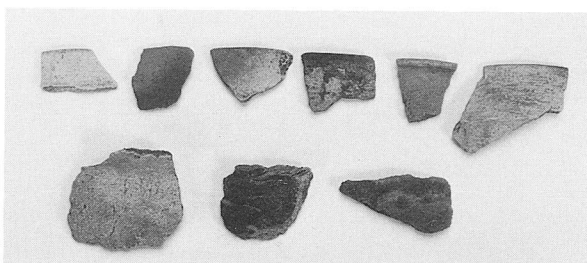
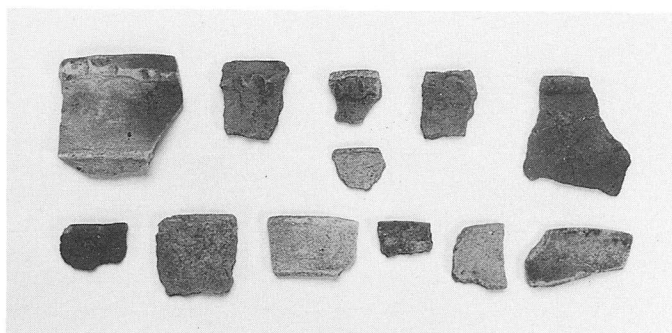
陶磁器と素焼把手 (A区)



A区出土陶器(薩摩系)



BK区出土土器



C区出土土器

海蔵寺遺跡
様屋敷遺跡

国道 221 号線バイパス
建設関係発掘調査報告書

平成 4 年 3 月

編 集 行 刷
発 行 刷
印 刷
宮崎県教育委員会
(株) 都城印刷
